

寝取られ特異点

～大事なサーヴァントたちが
当然のように寝取られる学園～



Presented
by 530

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

いつものように修正に言われたある特異点。
しかしそこでは何かが違っていた...

はあはあ

たゅん
たゅん

マスターは
違和感を覚えても
どつするところも
できない!

当たり前のように
赤の他人とセックスする
カルデアの仲間たち♡

たゅん

おっ♡
おっ♡
おっ♡

おっ♡

たゅん



特異点の中心——学園では
男の価値はち○ぽで
決まる！

長い時間かけて築いた
絆レベルもあっさり逆転

彼女たちは
変態どもの
虜に……♡

落第短小ち○ぽの
童貞マスターは
虐げられ……

あ……
……
……

ねたあ

くちなお

お♡♡

のりた

せろ

と……

と……

……

……

……

……

……

……

……



そして十ヶ月後！
受肉し、妊娠した
彼女たちは臨月を迎える…！



果たしてマスタIIは
この特異点を修正する
ことができるのか？！
（まきません）

※特異点にかっつめた
世界全体催眠NTR
みたいた感いです。



基本CG23枚+α(カットイン等その他差分多数)



SS版・吹き出し版・書き文字のみ版・文字なし版の4パターンを収録

「ん……………」

「……は……？」

「確か俺は……カルデアで……」

「ん……………？」

ぼん…

「い…は……………？
確か俺は……………カルデアで……………」

「ん……………」

ぼん…

「い…は……？」
「確か俺は……カルデアで……」



「〜……ムシク」

「あ……
おはようございます
先輩……っ♡」

ぼん……



「マッシュ……」

「……はあ……」

拠点として使わせて
いただいている部屋ですよ？
今回の特異点を調査するため
昨夜場所をお借りした……んっ
じゃないですか。♡

……大丈夫ですか先輩？
どこか具合でも……？」

ぼん……

はあ

「ああ、そうだった……
……うん、大丈夫……」

はあ

マッシュとの
絆レベル：5

「特異点の修正……
そうか……いつもの……
だよな……」

「ふふ…先輩、もしかしてまだレムレムしてます？もう少しお休みしてますか？」

「いや……大丈夫。ちよつとぼーつとしてるだけだから」

「レムです、か…っ♡
じゃ♡あ、眠気覚まし♡」
「コーヒーでも淹れますね♡」

「うん、ありがとうマッシュ」
(ん……っ？)
なんだこの音…)

レムレム♡

ぼー…

はぁ

「いえー
あ、ちよつとだけ
待ってくださるね」

はぁ

レムレム♡

(それマッシュ…
なんか息が荒…)
「レムー」

「う……ん……??」

「どうしたんですか先輩？
不思議そうな顔して…
私はただ普通にさ…♡」

「美少女後輩といつても
自由に交尾できる生活
最高お〜♡♡」

ババババ
ババババ

ガッ
ヂュッ
ヂュッ

「おじさまと
生ハメ交尾♡」

「このだけじゃ足りない♡
何かおかしなことを…」

「ふう〜♡♡いいよお
マシユちゃん♡♡
朝イチ交尾捗るよお〜♡
起きたらそのまま
朝勃ちち○ぽ即ハメ♡」

「いや、あれ…?」

ははは
ははは

「そうだよな…?
たゆん マシユは普通の
たゆん ことをしてるだけ…
だよな…」



「いや……はは、
まだ寝ぼけてるのかな？
何かがおかしい気がして……
その人は……この家を
貸してくれた人……だったよな」

「そうですよ♡
もう、先輩つたら……」

「ごめんねえ♡
キミの大事な後輩ちゃん
朝から頂いちやって♡
こんな可愛いハメ穴が
歩いてたら我慢でき
なくてさ♡♡♡」

「いいえ……
お気になさらず……」

「見ず知らずの私たちに
拠点を提供してくれたん
ですよ？
身体でお礼をするのは
当然じゃないですか♡
先輩も納得してたでしょ♡」

「おかげでち○ぽ
超幸せだよ♡
あ、ごめんついでに……
このまま膣内射精
するけどいい？」

「はひひひ♡♡♡」

ははは♡
ははは♡

たぶん
たぶん

「え……？
そ、それは——」

「はは、アハハハ♡♡」



「おはようございます」
「#8.....」

ぶいん

ぶいん

ぶいん
ぶいん

ぶいん

ぶいん

「ぶふ…っ♡♡
おじさまスゴイです…っ♡♡
昨日もあんなにしましたの♡
私の子宮も…っ♡♡」

ゼュルッ

「ぶひひひ
そうだったねえ♡
膣内射精とか
今さらだったね♡
なんせもうさんざん
愛し合った仲だもん
ね♡僕たち♡」

ゼュルッ

グズグズッ

ゼュルッ

10/10
ゼュルッ
ルルッ

ゼッ

「はいつ♡
…あれ、先輩
どうしました？(笑)」
「いや…なんでも…」

キュン

(なんでだ…っ？
なぜか悔しい気が
して…胸が…
マシユ…)

「身体の相性も超抜群
まだ出会って半日だけど…
もしかしたらもう
ずっと一緒に旅してきた
先輩より深い絆で結ばれ
ちやつてるかもねっ♡」

ゼュッ♡

ゼュッ♡

ゲヂュッ♡

ゼュッ♡

「さういうのは
時間じやない
からさっ♡
あくまで射精る♡」

マシュとおじさまの
絆レベル：50♡

10/10
ゼュッ♡
ルルッ♡

ゼッ

「でもかも
しれませんがね…♡
先輩とは一度も
セックスしたこと
ありませんし…」

「あ、そうなんだ(笑)
もしかして先輩くん
は童貞かな？」

「さうですよ♡
ね、先輩？」

キュッ♡

「……………うん…」

「はい、先輩
——お待たせ
しましたあ♡」

「あ、ありがとう…
えっと…マシユ…♡」

「あ、ちよつと
待っててくださいね♡
いまミルクも入れて
あげますから…♡」

はあ♡

はあ♡

「え……？
み、ミルクって…」

「はっ♡
ちよつと——」

ど

ろっ

「ふうすつきりした♡
じゃあマシユちゃん
また後でね♡」

ぐっ

トロ

ほが

ほが



「私とおじさまが作った
特別ブレンドです♡」

「う……う」

「まあ実際はほとんど
おじさまの精液ですけど(笑)
味は私が保証しますよ♡」

ん♡♡♡

ブル♡

「ふふ、どんどん
溢れてきます…♡
ほら、見てください先輩♡
先輩が寝てる間に
こんなに膣内射精
されちゃって…♡
ああ、もったいない♡」

「ま、マシユ…っ
せっかくだけで
俺、それは—」

「もう、先輩ったら…

せっかくの精液を
わけていただいたのに
失礼じゃないですか♡」

「い、いめん…」

ど♡ど♡

た♡た♡た♡

「それじゃあ私が
いただきますね♡」





「んっっ♡このエグみ♡
鼻を抜ける生臭いニオイ♡
やっぱりおじさまの精液は
最高ですね♡」

「う………」
(マッシュ)
おじさんの精液を……
あんなに喉を鳴らして……)

「……あれ？」
先輩も朝勃ちですか？
勃ってますよねそれ？(笑)



「それとも私が……
自分のサーヴァントが
他人と生ハメして♡
膣内射精された精液
ひり出して飲んでるの
見て興奮しちゃいま
しました？」

「いいいや
これは……っ」



「ふふ、
大丈夫ですよ♡
先輩も男の子です
もんね♡
ごめんなさい、
童貞の先輩には
刺激が強すぎた
かもしれない♡」

いっしょに♡
いっしょに♡
いっしょに♡
いっしょに♡
いっしょに♡

「でも今は我慢して
くださいね??
そろそろ出ないと
遅刻しちゃいます
から…」

「えっ…
遅刻って…?
そういえばマシム
その服は…」

「はっ♡
昨晚行った調査によると
この特異点の中心は
ある学園……」

45

じゅわん
じゅわん

「というわけで
場所に合った礼装を
用意しました♡
もちろん先輩のも
ありますから…」

どぼんどぼん

とろとろ
とろとろ
とろとろ

「……んん♡
だからそのカワイイ
勃起(?)ち○ぽは
いったん取めて
早く着替えちゃって
くださいね、先輩♡」

「……んん♡」

寝取られ特異点

～大事なサーヴァントたちが
当然のように寝取られる学園～

特異点の中心にある
とある学園——

教室へと続く
廊下——



「ここが特異点の中心…
見たところ普通の学園
だけど……」

「ええ、昨日
調査を行った限りでは
特に変わった点は
見られませんでした。
これまでの経験から
もっと異常な環境を
想像していたんですが…」

「これと違って
魔獣が出るわけ
でもなく、
そういう意味では
いたって平和な
学園ですね」

「うん……
これまでの特異点とは
何が違うのかな」

「マシンは昨日も
いっしょに」

「はい、この特異点に来てすぐ
転校手続きという名目で
少しだけ潜入調査を。」

私以外にもカルデアから
同行したサーヴァントたちが
調査にあたっています」

「そっか。
みんなももう
この学園に？」

「はい。
みなさんもう
登校されている
はずです」

「あ、先輩
そこ段差があるので
お気をつけて」

「うん。
ありがとう、マッシュ」

「いえ、私は貴方の
サーヴァントですから、
ごめくりい……」



「……先輩。

今回の特異点は
いつもと勝手が違う
かも知れませんが……
頑張りましょうね」

「そうだね。
必ず聖杯を見つけて
回収しよう——」



「あ、先輩
そこ段差があるので
お気をつけて」

「うん。」

「ありがとう、マッシュ」

「いえ、私は貴方の
サーヴァントですから、
ごめんなさい……」



「……先輩。」

今回の特異点は
いつもと勝手が違う
かも知れませんが……
頑張りましょうね」

「そうだね。
必ず聖杯を見つけて
回収しよう——」

「？」

「……………あー！
マッシュ！ ああ
あ~~~~んっ」

「えっ？」



「!?」

「おっはよお〜っ♡♡♡」

すぽっ♡

おっはよお〜♡♡♡

みみぢぢ♡

ぽっ♡

ぽっ♡

ぽっ♡

「おっ?♡」
「おっ♡」

もみ♡

「うひひひひ♡
ラッキい♡♡
朝からマシユさんに
会えるなんて♡♡
ちようどハメたい
なあ♡♡♡
たんだよね♡♡♡
な……♡」

「おっ♡♡♡
おは……♡♡」

もみ♡

ぞの♡

ト♡
チ♡
ユ♡
ツ♡

ト♡
チ♡
ユ♡
ツ♡

ズン♡

ズン♡

「おはよおっ♡♡♡
おっ♡♡♡」

「うん、おはよ♡
今日も朝からイイ腔
してるねえ♡♡
ち○ぽでタイツ突き
破って一気に奥まで
気持ちいい♡♡♡」

ズン

「あ、あんな…
いきなり何を…♡」

「?…何して…
セックス
挨拶だけど?
あんな誰?」

「そうですよ、先輩っ
これはただの挨拶……」

「朝クラスメイクした
会ったら普通にす
おはようの
セックスですっ♡」

「え……？」

「そっ♡そのために
下着もつけていない
んですから……っ♡♡」

「そういうこと♡
出会い頭に即合体
できるようにね♡」

もみ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ゼの

ト♡
チュ♡
ッ♡

ズン

ズン

ト♡
チュ♡
ッ♡

ズン

「ところで……ひひ♡
キミが噂の『先輩』か♡
朝からお手々繋いで
登校なんて仲いいね♡
まだ繋ぐ前だったかな(笑)」

「え、俺のこと
なんで……？」

「マッシュユさんから
話は聞いてるよぉ♡
短小ち○ぽの童貞(笑)
だけど優しい先輩だっ♡」

「あ、その話は……っ♡」

「ナイショだった？
ごめんごめん♡」

「……ん、ん」

「じ、実は昨日……私は一足先に自分のクラスに紹介されてまして……♡」

「それでクラスメイト、全員とお話しセックスしたんだよね♡
そのとき先輩さんの小ささに気づいちやったのかな(笑)」

「全員……!?!」

もみ♡

ゼッ

ト♡
チュ♡
ッ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ズ♡
ッ♡

ズ♡
ッ♡

「ごめんなさい先輩♡
おじさまだけじゃなくて……私、先輩の知らないうちに昨日だけで経験人数50人超えちゃいました……♡」

「他のクラスからも来てたからね(笑)
一周するの時間かかったよ♡」

ズ♡
ッ♡

「俺なんか三回も腔内射精しちゃってさあ♡」

「……………」

「先輩に無断で……ごめんなさい♡
でもまずはそうやって身体の相性を確かめ合うのが友好な関係を築く近道ですから……♡」

「そうなの」
「気にならぬわい」

「別に浮気して
るわけじゃ
ないんだからさ」

「ただ気軽に他人と
交尾してるだけで
ね、マシユさん」

「はいっ♡
私は先輩のサーヴァント
ですからっ♡」

「あくまで挨拶っ♡
友好関係を築くための
手段ですっ♡♡」

もみ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ト♡
チュ♡
ッ♡

ズン

ズン

ズン

「まあそういう
ことなんで(笑)
むしろこんな
普通のこと
で怒られてもな」

「いや、怒ってる
わけじゃ……
……そっか……
……そうだよな……
これが…普通…」

(また……
なんだこの
違和感……)

「お、さすが
優しい先輩(笑)
じゃあ遠慮なく
腔内射精させて
もらいますね♡」



「おっぱい」

おっぱい

おっぱい

おっぱい
おまんこ

ぽんぽん

ぽんぽん

「う……ん」

「んんん気持ちいい〜♡
マシユ穴最高お〜♡」

「あっ♡あっ♡
またあ…子宮
いっばいにい…♡」

「ぶふふ〜ダメだよお〜
マシユさあ〜ん♡セの
みんなの共有オナホ
なんだからこれくらい
全部飲み込まないと♡」

「……………」

セの

グググググ
グググググ

ゼン
ッ

グググ
グググ

どろろ

「はっ♡
はいっ♡」

「くそ…マシユを
オナホみたいにな…っ
マシユは俺の——」

「ひひ、そうそう♡
それから誰だか
わからない精子で
孕むところまでが
デフォだからね〜♡」

「いや、それにしてもマッシュさんはホントにいい子ですね、先輩さん」

「え……」

「俺みたいな陰キャにも分け隔てなく膣内射精させてくれて♡」

「な……何言ってるんですが、男性は見た目や性格じゃありませんよ……♡
大事なのはち○ぽの大きさですっ♡」

「#マッシュ……♡」

マッシュとクラスメートの絆レベル：35→40♡

ゼッ

ググググググ

ゼッ

「そっからそうだよね♡じやなきやとつくに先輩ともセックスしてるもんね？」

「え？」

どろろ

ア

びびり

「……あっき、気にしないでくださいね、先輩♡
っい……」

「……や……」

「じゃあそろそろ
教室行こっか
マシユさん♥」

「はっ♥」

「……では先輩、私はこのまま
先輩もご自分の教室に
向かってくださいね」

「わ、わかった……」

はあ

ん

「あ、そうだ！
せっかくだし
このまま繋がって
教室まで行って
みない？（笑）」

「あはは、
いいですね
それ♥」

はあ

ん

「別行動になって
しまいますが、
お互い調査
頑張りましょ♥」

ド
ロ
ビ

「では先輩、
また——」

「……」

「お」

「お」

「お」

「お」

(おかしさ……
やっぱりこの違和感……
勘違いじゃない気がする)

ア
ー
お

ア
ー
お

お、

お、

(でもその中で、
どうしようもなく
気持ち乱される
場面があった。
悔しいような
情けないような……
なんとも言えない
感じ……)

(……学校の様子は
教室に入ってから
別段変わったところはない。
みんないたって普通の
学生といった雰囲気だ。
マシユの言っていた通り
……この特異点に
異常な点は見られない)

(教室に来るまでに
もう2回……
朝起きたときと
さつきマシユが
クラスメイトと
挨拶をしていた
ときだ……)

(じつちのときも
マシユが一緒だった！
彼女がしていた行為に
問題があるのだろうか？
マシユは普通のことを
していただけなのに、
何か取り返しのつかない
ことが起きてるような…)

ア
ー
お

ア
ー
お

お、

お、

(……………もしかして、
気がつかないうちに
特異点の影響を
受けている…?)

「……ねえ」

(何か異常なことが
起きてるのにそれを
異常と感じさせない…
それがこの特異点の
特徴なのかもしれない。
……………だとしたら、
早く原因を
つきとめないと――)

「ねえ、ちよこ」

「…」

「かっかーん。
聞えんまわんわん」



「ようやく顔を
上げましたね。
せつかくこの私が声を
かけてやってるのに
無視をするなんて…
焼き殺されたいの？」

「オルタ……！
君も同じ教室
だったんだ」

「今ごろ気づいたわけ？
まったく…暗い顔して
入ってきたと思ったら」

「そんなことでは
先が思いやられますね」

「そうだよね。
ごめん…」



「まったく……あの『後輩』に何かあった？」

「え？なんで……」

「アンタが悩むなんてそれくらいしかないでしょう。」

「……今朝も仲良く一緒に登校してきたみたいですよし？」

「……オルタには敵わないなあ。実はちよつと……なんというか違和感を覚えることがあって——」

「違和感？」

マシユの言動に？

それとも……

この特異点にかしら。

詳しく話さない。

それともこの私では

頼りになる後輩の

代わりにはならない

とでも？」

ジャンヌ・オルタとの
絆レベル：10

「そんなことない。二人とも頼りにしてるよ。実は……確証があるわけじゃないんだけど……」



「おはよっ♡
ジャンヌ♡」

ん
ひ
ん
ん
ん

グ
グ
グ
グ
グ

「」

ん
ん
ん
ん
ん

「な…なんだ!?
いきなり!」

グロ

「ひょろろ……っ♡
人がひゃべっへるのに
いきなり突っ込む
なんて……
歯が当らつれも
知らにやいわよ♡」

グロ

「ごめんごめん♡
でもジャンヌが
彼と楽しそうに
喋ってるの見たら
なんか勃ちちゃってさ♡
ちよつと一発
抜かせてもらおうよ♡」

みち

ジャンヌ・オルタと
クラスメートの
絆レベル：45♡

「ひょろろがない
わね……っ♡♡
これがクラスメイト
じゃなけりや殺ひれる
ところよ……♡」

「ま、また……
くそ……なんなんだ
この感じ……っ」

「キミ転校生だよな？
ジャンヌとは前から
知り合いなの？」

みちこ

グア
グア

「う、うん……
同じところから
来たから……」

「へえ、そうなんだ♡
じゃあ知ってるから♡
コイツの口ま〇こ
けっこうイイよね♡」

「い……いや…俺は……」

「知らないわよ
ソイツ童貞だから♡」

「え、マジ？
その歳で？
こんなすぐやれる
女がそばにいたのにな？
マジメだね」

「俺たちなんか
昨日会ったばかり
なのに即ハメだよ♡
その日のうちに
全穴フルコンプ♡
ね、ジャンヌ？」

「……」

「……ひゃいわね……♡
ひよんなころより
いま大事な話してるん
らけど？」

「あ、ごめんごめん♡
じゃあすぐ射精し
ちやうからっ♡」



「!?」

「アキバ」

アキバ
F1

アキバ
F1

アキバ
F1

アキバ
F1

「おほっ♡おほっ♡
おほっ♡おほっ♡」

「ひひ、これこれえ♡」

「それにジャンヌつて
こう見えてけっこう
マゾでさっつ♡
ち○ほで窒息すると
悦ぶんだよね♡」

「おほっ♡
おほっ♡
おほっ♡」

「ジャンヌの口ま○こは
喉がいいんだよね♡
あ、知らないんだっけ(笑)」

「ちよ、ちよつと
やりすぎじゃ…」

「いやいや大丈夫大丈夫♡
童貞の君にはわからない
だろうけどこれが
女の口はこうやって
使うのが普通だから♡」

「おほっ♡
おほっ♡
おほっ♡」

「おほっ♡
おほっ♡
おほっ♡」

「ほら見て♡
喉きゅっつと締めて
完全にち○ほ受け
入れてるでしょ♡」

「おほっ♡おほっ♡
おほっ♡おほっ♡
おほっ♡おほっ♡」

「オルタ……」

「射精るう〜っ♡♡」

おはよう♡♡♡

おはよう♡

おはよう♡

おはよう♡



「ん〜これこれ♡
やっぱ朝はこれに限るっ♡
ジャンヌのおかげで今日も
一日元気に過ごせそうだよ♡」

「JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡」

「ジャンヌも栄養補給できて
ワインウインでしょ♡
朝食はしっかり食べなきゃね♡」
「オルタ……」

「JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡
JKUNNN♡♡」

トキ
トキ
トキ

トキ
トキ
トキ

トキ
トキ
トキ

ゼウ
ゼウ
ゼウ

ゼウ
ゼウ
ゼウ

「お、オルタ……?」

「あ、やべ…
もう授業始まるじゃん♡
んじやまたね♡」

「JKUNNNNNNN♡♡」

「JKUNNNNNNN♡♡」

「うわー!」



げんま!!

ハハ

ほっ

ちゅ

ちゅ

「お、オルタ…っ
大丈夫!?」

はー♡
はー♡

「げほっ♡♡
ごほっ♡♡
……な…何を
騒いでるんです?

たっ♡ただ…っ♡
酸欠アクメをしながら
飲み込んでた精液が
逆流して…ザーゲロ
キメただけでしょう?♡」

と♡♡

べと♡
べと♡

「それくらい童貞でも
見たらわかると…
思いますがつ?♡♡」

「そ…そうだけど…
あ、あれ…?」



「はあ……♡はあ……♡
そ…それより」

「話は何だったわけ？
まさかマッシュが
誰かとヤツてたなんて
くだらないこと
だったら殺すわよ？」

「はあ……アンタねえ。
サーヴァントたちが
誰と何をやるうが
問題じゃないでしょう」

とじ♡♡

べと♡お♡

「それともなに？
周りの女はみんな
処女じゃないと
許せないわけ？」

ふん

る

ふん

「こや…
そういうわけ
じゃないん
だけど…」

「女の経験人数を
気にするなんて
度量の狭い男の
することよ」

「……まあいいわ。
授業が始まるから
話の続きは後でね」



「お前ら座れ
授業始めるぞ」

「……と、その前に
今日も転校生が
来てるはずだが……
ああ、いたな。
きみ、ちよつとだけ
自己紹介を頼むよ」

「あ……はい」

「カルデアから来た藤丸です。よろしく…」

「もう聞いてる者もいるかもしれないが、藤丸はまだ童貞だ。みんな優しくしてやれ」

「は〜ん」

カルデア
ってどこ？
外国？

知らねーけど
ジャンヌも昨日
そう言ってたよな

なんか頼り
なさそー

あいつ童貞
らしいよ(笑)

マジ？
絶滅危惧種
じゃん(笑)

「幸い」時限目は
俺が担当する
保健体育…
それも今日は
セックス実習
だからな」

「そうだな…
それじゃあ藤丸は
ジャンヌとペアを
組みなさい。
知り合いなら
やりやすいだろ？」

「……………」

「はあ…
仕方ないわね」

「安心しろ藤丸、
俺がきちんと童貞卒業
までサポートしてやる」

「え……？
な、なんでそれ…」

「は〜ん」

「は〜ん」

「は〜ん」

「よし、準備できたな？」

「それじゃあセックス実習を始めるぞ！まず女子は仰向けに寝転んで胸とま〇こを男子に見せろ♡」

「ん……」

「よく見えるようになるべく下品に大股を開いて手は頭の後ろでしっかりと組めよ♡服従の意志を身体で示すんだ♡」

ぱん♡

みち♡

みち♡

ん♡

「恋人なら手を繋いだり抱き合ったりもするがそんな場合はほとんどないからな♡」

せーん

「その基本姿勢をしっかりと覚えるんだぞ♡」

「お、オルタ……」

みち♡

「あ、あのオルタが…
こんな無防備な姿を晒して…
そ…それにこれからオルタと…!?」

「この授業って…
こ、これも普通
なんだよな…?」

「よし、そしたら次は
男子の番だ!
ち○ぽを15センチ
以上に勃起させる」

「え……!?」

「最低でも10センチだぞ、
そうしないとセックスは
不可能だからな」

ぱんぱん

おち

おち

ん

「……ちよひん、
アンタ何してんのよ?
早く勃起させなさいよ!
それとも私じゃ
勃たないつてわけ?」

「さあ……
……おひさひさひ…」

「……おん
嘘ついても……」

せーん

おち

「ん？
どうした藤丸
調子悪いのか？」

「んやんこれは…」
「はあ……つたく…
……センセー」
藤丸はこれで
限界らしいです」

ギョ

「なに〜？
そいつはまずいな…
少しなら大目に
見てやることも
できたが…」

「それじゃあジャンヌが
処女だったとしても
処女膜を破れないじゃ
ないか(笑)」

「……………」

「仕方ない、
まずは俺が見本を
見せてやる♡
ちよつとそこを
代わりなさい」

せつ

せつ

「ほら！
勃起っつていうのは
こうするんだ♡」

ドキドキ♡

「……♡♡」
「ほら、凶悪ち○ぽを
見せつければ自然と
女も欲情する♡
簡単だろ？
見ろこの物欲しそうな顔♡」

モウシ

♡ゆん♡

セキ

セキ

「俺のは30センチ
はあるからな♡
参考にならん
かもしれないが…
せめてこれの
三分の一くらいは
頑張ってくれ(笑)」

「…♡」

「このまま
セックスの仕方
も教えてやるから
お前はしつかり
見学するんだぞ♡」



「んお♡おっ♡」

「えっ」

「ん、んや...」

「まあこんなもんだ♡
童貞のお前には想像
できんかもしれんが
俺にとつては
日常茶飯事だからな♡」

「ん、ほら入ったぞ♡
これでジャンヌと俺は
今セックスしてるわけだ♡
.....ん、どうした？
あまりにあつさり
挿入したから驚いたか？」

せりっ

せりっ

キゅん

キゅん

「おほ♡
おっ♡♡」

「それよりよく見とけよ♡
まずはこうやって
浅めの感触を亀頭で
味わうんだ♡
気分にもよるが(笑)」

「んお♡♡」

「そしたらま〇は
すぐに馴染んで
くるからなあ♡
そこで「気づら〜」

ぬちゅ

ぬほっ

ぬほっ

「突き刺すっ♡♡」

たゆん♡

たゆん♡

「おほほっ♡
これだこれ♡
根元まで一気に
挿入っ♡♡
気持ちいい
っ♡♡♡」

おっ♡♡

おっ♡♡

ギンギン

おっ♡♡

「わかるか藤丸、
女をち○ぽで串刺し
にしてやるっ♡♡
これがセックスだ♡」

ズンズン

「竿全体で
腔内の感触を
味わいながら
亀頭で子宮を
滅多突きっ♡
ほらジヤンヌも
嬉しそうに
のけ反って♡」

「うーやっつっ♡
おらっ♡♡おらっ♡♡」

「心配するなっ♡
これくらい
何でもないっ♡」

「腰をがっちり固定して
引き抜かずに奥へ奥へと
突き進み続けるのが
ヨツだっ♡♡」

「お、オルタ...♡」

おっ♡

たゅん♡

たゅん♡

おっ♡

おっ♡

ズ
ン
ッ

おらっ♡

おっ♡

ズ
ン
ッ

ズ
ン
ッ

「女は元々ち○ぽを
受け入れるように
設計されてるマゾ
なんだからなっ♡」

「本気で
突かなきゃ
ダメだぞっ
おらっ
射精すぞっ♡♡
マゾ女っ♡♡」



アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ
フュー!!

「そして膣内射精♡
ここまでが
一連の流れだっ♡」

んんん♡♡♡♡♡

「女は支配されて悦ぶ
生き物だからなあ…♡
遺伝子レベルで
征服してやるのが
重要だぞっ♡♡♡
女にリスクを
背負わせて
気持ちよく射精
するんだ♡」

ゼッ♡

ゼッ♡
ゼッ♡
ゼッ♡

ゼッ♡

ゼッ♡
んんん♡♡♡♡♡

ゼッ♡

ゼッ♡

ゼッ♡

「事実そうだろうっ♡
女がガキを産んで
勝手に育てればいい
だけの話だからない♡
保健体育は
それを学ぶための
授業だぞ♡」

ゼッ♡

ゼッ♡

ゼッ♡

ゼッ♡

んんん♡♡♡♡♡

「ぞ、そんな…」

「ふう〜〜まだ
止まらん♡♡」

んんん♡♡♡♡♡

「相変わらず
ジャンヌのま〇こ
は食欲だなぁ♡
昨日の今日で
まだ欲しいか♡」

「え…?」

「よし、次は藤丸
お前の練習だ♡」

せりっ

ゼルゼルッ

せりっ

おん♡♡♡

ゼル

ゼル

ゼル

おん♡♡♡

「俺とジャンヌが
このまま二回戦
いくから♡
お前は自分が
してるつもりで
オナニー
しなさい♡」

ゼル

ゼル

ゼル

ゼル

「ふうっ♡ふうっ♡
ふ♡ふ…っ♡♡♡」

「よし、いいぞ
その調子だ藤丸！」

「短小ち○ぽを
セックスできる
レベルまで育てる
にはイメージ
トレーニングが
効果的だからな！」

シッ

シッ

ぐちゅ
ぐちゅ

シッ

お♡
お♡

「実際にジヤンヌの
デカ尻をパンパン
してるのは俺だがっ♡
自分がハメてるつもり
でシッくるんだぞっ♡」

「う…オルタ…
オルタ…っ♡」

いっ♡
いっ♡
いっ♡
いっ♡

いっ♡
いっ♡
いっ♡
いっ♡

みぢ

みぢ

ぐちゅ
ぐちゅ

バチン♡
バチン♡

バチン♡
バチン♡

ぐちゅ
ぐちゅ

「ただ闇雲にシゴるなよ
ちやんとジヤンヌの
膣内の感触を想像
するんだっ♡」

「ぎゅ〜つと
押し返してくる
膣内を掘り進むと
ひだひだがねっとり
絡みついてきて♡」

「いっちばん奥で
ぶるっぶるの子宮口が
亀頭に吸いついて
くるんだっ♡♡
これは数あるハメ穴の
中でも相当名器だぞ♡」

「童貞には難しい
おまえ
かもしれないが(笑)
できる限り具体的に
イメージしろっ♡」

「オルタの…膣内…っ♡」

「ぶっ
ぶっ…♡♡」

おっ♡

くちゅ♡

シッ

おっ♡

みぢ♡

くちゅ♡

みぢ♡

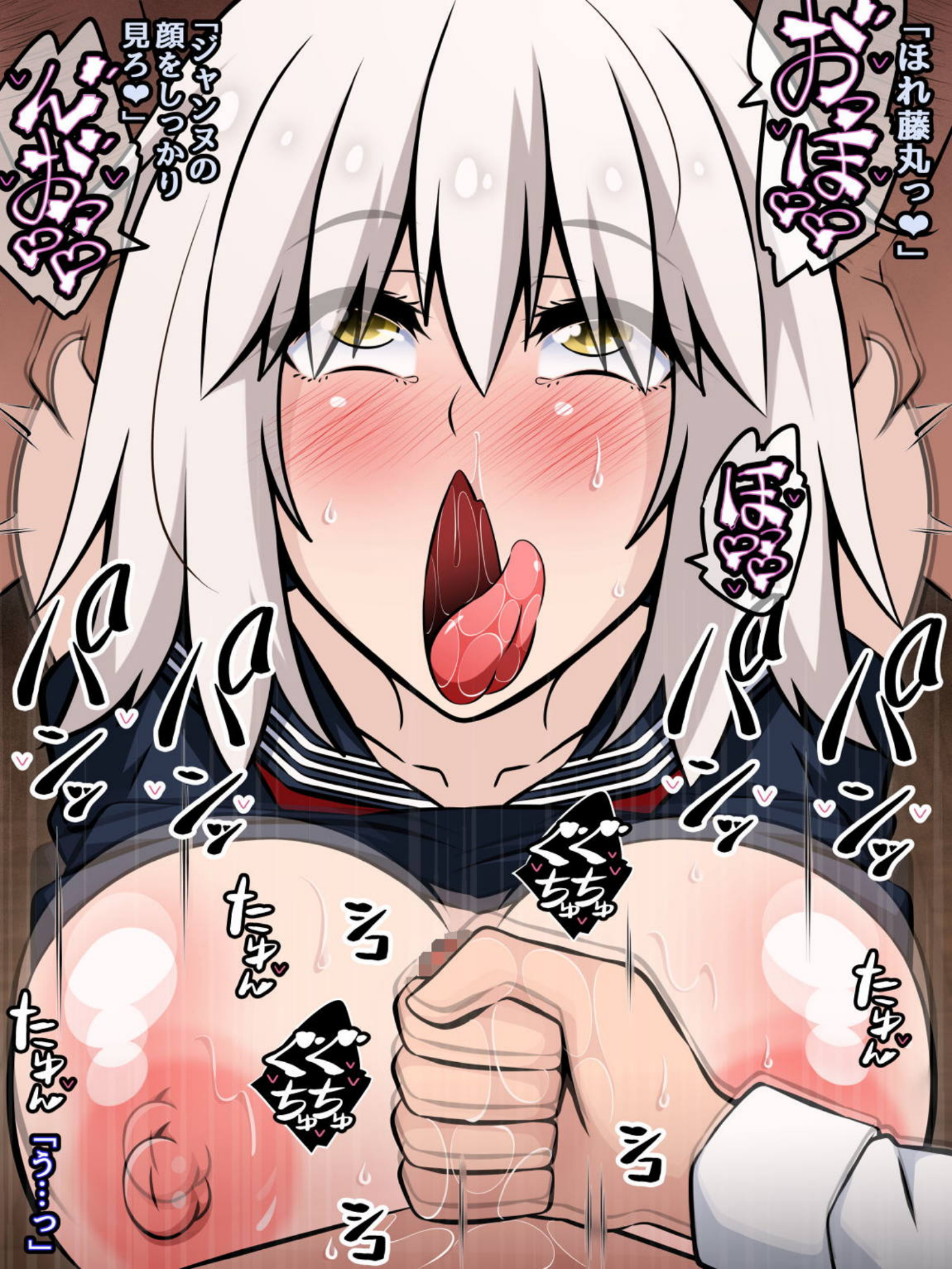
くちゅ♡

おっ♡

バチン♡

バチン♡





「ほれ藤丸っ♡」

ほれ藤丸っ♡

「ジャンヌの顔をしっかりと見ろ♡」

ジャンヌの顔をしっかりと見ろ♡

ほれ藤丸っ♡

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡ 「んっ♡」

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡

ちゅちゅ♡

「女にこのアホ面をさせるのが最終目標だぞー！」

おっぱい

「それにはまず今の三倍はち○ぽを大きくしなげりや話にならんっ♡」

「あ、あのオルタが…こ…っ♡こんな表情するなんて…っ♡」

おっぱい

おっぱい

ぐちゅ

たゅん

「特にジャンヌみたいな女は難しいぞっ♡」

たゅん

「俺でも墮とすのに一晩かかったんだからなっ♡」

ぐちゅ

たゅん「え…っ♡」



「そうか、言っていなかったな♡」

おんおん♡

「実は昨日

ジヤンヌは

俺のアパートに

泊まったんだ♡」

「……!!」

「まあいわゆる

お持ち帰り

つてやつだな♡

気に入った女生徒は

いつもそうしてるんだ♡」

おんおん♡

おんおん♡

ぐちゅ♡

たやん♡

「生意気ま〇しも
一晩中ハメ倒して
やったらこの通り♡」

る

たやん♡

ぐちゅ♡

「アへって
ち〇ぽに媚びる
雌犬に早変わり
つてわけだ♡」

たやん♡

「……♡♡♡」

「くそ……」

おっぱい

「オルタ……」
「オルタあ……」

「おいおい(笑)
ちやんと自分が
ヤツてるイメージで
オナニーしてる
だろうな？」

おっぱい

おっぱい

ちゅちゅ

「ぐんぐん」
「ぐんぐん」

ちゅん

ちゅん

ちゅちゅ

ちゅん

ちゅん

「ジャンヌが寝取られてる
イメージでシ」ってちや
意味ないぞ？」





「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

「よし、射精したな♡」

おっぱい♡

「最後のほうは
ちやんとできてるか
怪しかったが…(笑)
まあいいだろう」

「ふんふん♡
ふんふん♡」

「初めはそんなもんだ。
……それにしても
随分量が少ないな？
ちやんとメシ食へてるか？」

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

「ふんふん…♡」

「今もう一度手本を
見せてやるからな♡
射精っていうのはあ」



「いっしょする
んだっつる」



ピンクの髪

アハハハ

?

デ
グッ

グチュル〜ッ!!

「ん〜いいぞおジヤンヌ♥
またちや〜んと膣内射精
受け入れられたなっ♥
それでこそ俺の生徒だ♥
可愛いヤツめ♥」

「う…っ♥
お、オルタ…っ♥」

おははは

「ん？なんだ藤丸
また射精したのか♥
なんだそのお漏らし
みたいな射精は(笑)
さつきも言ったが
寝取られた気持ちに
なってシコるのは
逆効果だぞ？」

「寝取られ
オナニーは
癖になる
からな(笑)」

ジヤンヌ・オルタと
教師の絆レベル：
55→60♥

おははは

「う…
ふう…っ♥」
ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ

びゅん
びゅん
どろろ

トロ

どろろ

どろろ

「さて、そろそろ…」

「んお♡なま〜♡ん♡♡」

「おほっ♡♡♡
いい加減ち○ぽ
離しなさい♡」

ギョウザ♡
ゴボ♡
ゴボ♡
ゴボ♡

「そんなにま○こ
食いしばって
引き留めるな♡
優秀なオスを
逃したくないのは
わかるが…♡」

ゴボ

ゴボ

ゴボ
ゴボ
ゴボ

ゴボ

んほっ♡♡♡

「おっ 藤丸まだいたのか(笑)
授業時間も過ぎてしまったな…
どうだ、
たくさん
シコレたか？」

ほっ♡

ぬ♡

「おっ…おっ…
おっおっ…」

「おっ♡
おっおっ…」



おっ♡

おっ

ぐちやお♡

おっ

おっ

ん

ん

ん

ん

ん

ん

「どうも途中でついてこれて
なかったようだが…
そんなことではいかなぞ？
女の子宮を満たしてこそ
立派な男つてもんだ♡」

「あへ♡♡♡♡♡
あえ♡♡♡♡♡」
ほっ♡

ぬ♡

っ♡

っ♡

っ♡

っ♡

ぐちよお♡

っ♡

っ♡

「ほら藤丸
こっちに来い」

っ♡

「ジャンヌ、
藤丸にどれだけ
膣内射精されたか
見せてあげなさい♡」

っ♡

「はっ♡♡♡♡♡」

「っ♡♡♡♡♡」

「んへっ♡♡」

「うわ…っ」

「ひっひひ♡」

「どうだ、藤丸？」

「これがセックスで
女を支配するって
ことだ♡」

「例えばこの
俺が膣内射精した
精液をぜんぶ
お前が射精したと
想像してみろ♡
支配感エグいだろ？」
「は、はあ……」

ズル
っ

ポポポッ

ポポッ

「はは、想像も
できないか(笑)」
ズル

「俺は感じてるぞ、
気に入った女を
やりまくってれば
勝手に堕ちる♡
こんなイイ仕事は
ないからなあ♡」



「さて、俺が教えてやれる基本はとりあえずこんなところだ♡藤丸は他の生徒のところも見学してみたらどうだ?」

「え……」

「安心しろ、二時限目もこのまま延長して保健体育だ俺もまだヤリ足りないからな♡ジャンヌのせいだ♡」

「くっ♡くっ♡」

ズン

ぐっ

ポポポッ

ポポポッ

「色んなセックスを見るのも勉強だぞ! ほら行った行った」

「は、はい……」

「寝取られオナニーには気をつけろよ(笑)短小童貞が一番陥りやすいところだ」

「寝取られマゾ側が染みついてしまうと戻れないからな(笑)」

……

「……」

「お
お」

「お
お」

「お
お」

「お
お」

「あれは……」

「ふふ」

10
3



「授業にかこつけて
私に触れようだなんて…
とんだ身の程知らずね
貴方たち」

「この私がそうやすやすと
身体を許すわけないでしょ？
殺されなかっただけ
ありがたいと思いなさい」

(メルト……！
周りに倒れているのは
男子生徒たちだ……！)

うず

うず

うぐ…

う…



「ふふ…残念ね、制服に合わせて零基础を弄っていで。いつものヒールだったらもつと酷い目に合わせてあげられたのに♡」

「本当ならこのまま溶かして養分ゼリーにしてやりたいところだけど…それは我慢してあげるわ。貴方たち味気なさそうだし」

（あの様子だと…）

保健体育の授業で相手をしようとした生徒たちを返り討ちにしたのか…？



うず

うず

うぐ

うぐ…

う…

うぐ

うぐ

「……………」

(なんとなく…ほっとした気がする。
なぜだろう。メルトの行動は
特異点
この学園を調査する目的には
そぐわないのに……)

うず

うず

(ちゃんと学園に溶け込んで
馴染んでいたマッシュや
オルタを見たときより…
ずっと…安心してると…?)

「いい?」
私に触れていい人間は
あの人だけなの。
貴方たちみたいなのには
間違っても指一本——」

うぐ

うぐ…

う…

うぐ

うぐ



「メルト」

「あら♡
来てたのね」

メルトとの
絆レベル：10

又。。

「ご主人様っ♡♡」

っ♡

「おんおん」

っ♡

ちっ♡

っ♡

っ♡

!?



「ん〜♡ひん♡♡♡
ちゅる♡ちゅる♡
ごひゅじん♡♡
ひやまつ♡♡♡」

♡♡♡♡♡
ちゅる♡
ちゅる♡
♡♡♡♡♡

「うむ♡♡
ひやまつ♡♡♡
ちゅる♡♡♡
ちゅる♡♡♡
ちゅる♡♡♡

ちゅる♡
は♡

ちゅる♡
は♡

ちゅる♡
は♡

「め、メルト...??
「んひひっ♡
いきなり
情熱的だなあ♡
メルトちゃん♡」

「ほらもつと
舌絡めて
唾液交換
しよ♡♡
じゅるる♡
ぢゅるる♡
ぢゅるる♡
ぢゅるる♡
ぢゅるる♡
「♡♡♡」

♡♡♡
く♡
ち♡
や♡

♡♡♡
ちゅる♡
ちゅる♡
♡♡♡

「ふあ……ご主人様あ♡♡」

「んっ♡おはよ〜メルトちゃん♡」

ぬっ♡お♡

「相変わらず口くで
美味しい唾液だね♡
溶けちゃいそう♡
遅くなってごめんね♡
ちよっと色々あってさ〜」

「ん〜ん、平気♡
ご主人様が来るまで
アイツら虐めて
遊んでたから♡」

は♡あ

は♡あ

は♡あ

「あ、もちろん
身体には指一本
触れさせてないわ
私はご主人様の
モノだから……♡」

「うんうん、
わかってるよ♡
メルトちゃんは
ホントにイイコ
だね♡」

「め、メルト……」

「……あら。
貴方もいたの?」

「ええ、まあ……
ただの顔見知り
つてところだけど。
ね? マスター?」

「え……ま、まあ……
うん……」

ひちゅ
ひちゅ

ひちゅ
ひちゅ

「そうかそうか♡
可愛い子ばかり
周りにいて
羨ましいよ(笑)」

実は僕この学園に
特別講師として
呼ばれていてね♡
ときどきこうして
指導にきてるんだ♡
メルトちゃんとも
そのとき会って
ねえ♡」

「おや、君は……
『先輩くん』じゃないか。
また会ったね(笑)」

「……!」

(この人…朝マッシュとしてた…
抛点を貸してくれてる……)

「メルトちゃんも彼と
知り合いだったんだね」

「ええ。それで指導を受けているうちに気がついたの」

メルトとご主人様の絆レベル：70♥

「もちろん、貴方に言われなくても特異点の調査は問題なく進めているわ♥
というかこれもその二環なのだし…
それかわかつているわよね？」

「……………うん…」

ひちゅひちゅ

ひちゅひちゅ

「この人が私の本当の主人様なんだって♥
メスが強いオスに支配されるのは当たり前…
知っているわよね？」

「う、うん……
で、でも…」

「そうかそうか納得してくれたならよかった♥
調査とか特異点とかはよくわからないけど…
安心したよ、もし君がマシユちゃんやメルトちゃんのこと好きだったら悪いからね(笑)」

二人とも先に僕が頂いちやって♥」

「代わりと言っちゃ
なんだけど
特別に君にも
指導してあげるよ。
見たところ君、
童貞卒業資格
ないでしょ？」

「ち○ほでメスを
支配できない
弱いオスは
メスに虐められて
強くなるもの
だからねえ♡
そういう意味じゃ
メルトちゃんは
適任でしょ♡」

「え？」
「あ……はい……」

「そうだなあ……
じゃあメルトちゃん
彼のことも
虐めちゃおつか♡」

「えっ」

「……」

ち○ち○

ち○ち○

ち○ち○

「ああ、そういうこと……
わかったわご主人様♡
ほら貴方も
ぼさっとしてないで……
さっさと
ズボン降ろして
こっちに來なさい」

「……」

「め…メルト……」

「ちゅん♪
じゅんじゅん♡♡♡」

「えっ？」

「ただでさえ
親指サイズの租チン
のくせに……
この私を前にして
勃起していない
じゃない」

「これから私が
虐めてあげるって
言ってるのよ？」

その恥ずかしい
短小ち○ぽ充血させて
フル勃起するのが
当たり前でしょう」

ほうん

「…それとも私じゃあ
勃たないって言うの？」

「い、いやそらうらうら
わけじゃ…」

「実はさっきまで
オルタとの授業で
その…何度もお…
オナニーしてて…」
「そんなの言い訳に
ならないわ」

「いえ、私を差し置いて
他の女にかまけてた
なんて余計に夕子が
悪い」

ほうん

「仮にもマスターだし
手加減してあげようか
とも思ってたけど…
これはキツイ
オシオキが
必要なようね♡」

「ほらー！
早くこのクズち○ぽ
勃たせなさいっ♡
じゃないと一生勃起
できなくなるわよっ♡」

「あっ
う……っ」

「それとも
このまま
踏みつぶされ
たいのかしら？」

「私は別に
構わないけど？
こんなモノ」

「め、メメント……っ」



「んっ…っ」

「ふふ♡」

「そうよ、やれば
できるじゃない♡」

「……それにしても」

「何、コレ？(笑)」

「勃っても全然
大きくならない
じゃない♡」
「親指サイズのまま」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「通りでカルデアでも
誰にも手を出して
なかったわけね…」

「んっ♡…」

「ごんなのじゃあ
女を満足させるなんて
夢のまた夢だもの」

「……」

「ふふ…やっぱり踏み潰してしまおうかしら♥
どうせ使い道ないわじょり
「レ？」
「い…っ メルト…!!!」

「だって貴方人類のために闘ってるんでしょ？
こんな劣等遺伝子ここで排除したほうがいい♥ね？
ほら♥ほらっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「んっ♥」

「うっ♥うっ♥」
「マツ豚が主人に媚びれる方法はひとつだけよ♥
ほら」

「め、メルト、やめ…♥
「やめてほじかしたら
「わがっ♥わがっ♥わがっ♥」



「早く射精し
なさいっ♡」

「んん——♡」

「んんん♡」

「んんん♡」

「んんん♡」



「うう……っ♡♡♡」

「はいお疲れさま♡♡♡」

射精………ん？

射精したわよね？

ものすごく量

少ないけど…

しかもこんな

微量精子のくせに

私の足を汚すなんて…

マスターじゃなかったら

溶かしてるところよ」

「はあ…はあ…

め、メルト…」

「まあいいわ♡♡♡
一応は射精せた
のだし…
ご褒美をあげる」

「私とご主人様の
セックス♡♡♡」

特別に特等席で
見せてあげるわ
好きなんでしょ？
そういうの♡♡♡」

「……………」

と♡♡

せ♡♡

せ♡♡
せ♡♡

ら♡♡

へ♡♡

と♡♡

り♡♡
り♡♡



「ちなみにジャンヌオルタ
では何回射精したの?」

「え……う……5回……」

「そうじゃあ私では
10回射精しなさい♥」

「え……!?!」

「当たり前でしょう?」
他の女でオナニーした
だけで処刑ものなのに…
回数でも負けるなんて
とても許せないわ♥」

りたり

へ

ト

せ

ら

せ

「頑張りななな♥
このまま
私が手伝って
あげるから♥」

「……………」

「それくらいしなまや
鍛えてるじつじつは
ならならいじょい♥」

「それに貴方は10回
射精してやつと
ご主人様の1回分
に届くかどうか……」



「あら、ちんこがごめ〜
私の秘部」
おま○こ

「こんな機会でも
なければ貴方は一生
見ることもなかった
でしょうね♥」



ろ

ん♥

トロ♥
トロ♥

の♥
の♥
の♥

「ご主人様に
感謝して
しつかり射精
するのよ♥」
「う……」



「め、メルト…」

「なに？」

「私とご主人様が
愛し合うところを
間近で見れるなんて
貴方にはもつたいたい
おかずでしょう♡」

「射精できないんで
言わせないわよ。
10回射精のノルマ
なんか楽勝よね♡」

「う……」

トロ♡
♡

の♡
の♡
の♡

「ただし私には
指二本触れては
ダメよ♡
貴方はそこで
見てるだけ」

「恋人(笑)は床に
つけたまま
動かさないこと♡」

「ダメち○ぽは
私が虐めて
あげるから♡
わかったわね？」

カ

「さて、そろそろいいかな
メルトちゃん♡
こんな美味しそうな
おま〇こ見せられたら
僕もう我慢できないよ♡」

「ええ、もちろんよ
ご主人様♡」

「雑魚イジメ
も済ませて
私も準備完了
だし……っ♡」

ギンギン
ギンギン
く

キュン

ちゅっ♡

トロ♡

の♡
の♡
の♡

「ほら、
よく見なさい
マスター♡
貴方のは
似ても似つかない
本物ち〇ぽ♡」

く……」

「くすくす♡
もう思い知ってる
でしょうけど……♡
女を支配する側に
なりたければ
このち〇ぽを
見習うことね♡」

「ひひ…♡
それじゃあえ〜と…
藤丸くん？」

「今からメルトちゃんも
いただくからね♡
よく見ておくんだよ」

「は、は〜…」

キョ
キョ
キョ

ちゅ…♡

ギン
ギン
ギン
く

「ん…♡」

「それじゃあ
いただき〜」

トロ♡
トロ♡

のり♡
のり♡
のり♡

おん♡

おん♡

おん♡





ん
お

お

ズ
び

「まあ〜〜〜ああすす」

ぢぢぢ

ちちちち

ちちちち

ズ
び
ぢぢぢ
ちちちち

ちちちち

「ひひ♡ありがとね♡
藤丸くん♡
メルトちゃんのおま○こガン突き
するの最高に
気持ちいいよ♡
マシユちゃんとは
また違った味わいだ♡」

くほっ
くほっ
くほっ

「ふっ♡
ふっ♡」

フェツ

フェツ

「え…な、なんでお礼なんか…」
「いやいや、
だつて二人とも
キミが連れて
きてくれたんでしょ♡
こんな極上穴に
手をつけずにさ♡」

くほっ
くほっ

は♡♡♡

は♡♡♡

の♡♡
の♡♡

「それに
メルトちゃんの場合、
君を虐めてとろけた
ま○こを僕が
いただいでるわけ
だから♡」

「藤丸くんには
感謝しかないよ(笑)
ね♡メルトちゃん♡」

「ええっ♡そうね♡
いいダシになってくれて
ありがとうマスター♡」

「……………」

「……………」



ぐほっ

ぐほっ

ぐほっ

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

「う、う、う……っ♡♡♡」
「あは……っ♡♡♡」
「もう射精したの？
さっきはあれだけされて
やっとな射精したのに……
本当に好きなのね
寝取られオナニー♡」
量は相変わらずだけど……(笑)

くほっくほっ

「寝取られオナニーは
よくないって
教わったんじゃない？
なかったの？(笑)」
ホントどうしようもない
マゾ豚ね貴方♡」

ほっ

ズブツ

ズブツ

はっ♡♡♡

はっ♡♡♡

「ち、ちが……」

「いいえ、
自分より強いオスに
サーヴァント奪われて
本当は悦んでるん
でしようっ♡♡♡」

ズブツ

「童貞が触れたことも
見たこともなかった
おまのことが他人に
使われてるのが
イイんでしよう♡
ねえ♡ほら♡
ほらあ♡」

ズブツ



ぐほっ

ぐほっ

ぐほっ

「んんんんんん」

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

「ううう...♡♡♡」
「ほくらまたイッた♡
ご主人様が1回射精す
間にもう2回目♡
情けない負け犬ね♡」

ぐほっ
ぐほっ
ぐほっ

「ひひ♡
まあまあメルトちゃん
それくらいにしどいで
あげなよ♡
そろそろ僕も
射精すからさ♡」

ぐほっ
ぐほっ

は♡♡♡

は♡♡♡

の♡♡♡
の♡♡♡

「ええ、ご主人様♡
...ほらマスタ！
わかってるわね？
ご主人様に
感謝を込めて
もう1回よ♡」

「ご主人様が
本物の射精を
見せてくれる
貴方が
だ♡い好きな
瞬間に...♡」

「あゝ射精る♡」

「んほん」

んほん

ほん

「んほん」

んほん

んほん

んほん

んほん

んほん

んほん



「やう…♡♡やう…♡♡」

「おっほほ♡♡
気持ちいい♡♡」

「極上穴に膣内射精♡♡」

「んひ♡♡
ご主人様♡♡」

ビュルッ

ドクッ

ぶせ♡♡

「藤丸くんが床に精液
まき散らしてる前で
メルトちゃん
遺伝子ませませ♡♡
これは優越感に
浸っちゃうな♡♡」

ビュルッ

ぶせ♡♡

どろ

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

どろ

どろ

メルトとご主人様
の絆レベル：
70→100♡♡

セリッ

どろ

「ご主人様のアツい
精液子宮で感じる♡♡
ステキ♡♡
ご主人様あ…♡♡」

どろ

「ごんな童貞より♡♡
ご主人様のほうが
10倍好き♡♡」

どろ

「はい7回目〜❤
ほらほら
どうしたの？
ペース落ちてるわよ
早漏のくせに❤
量もどんどん減ってる(笑)」

「め、メルト…
も…もう無理…っ」

「だめ❤
私は他の女みたいに
甘くないわよ❤」



「貴方のごと徹底的に
鍛えてあげるって
決めたんだから❤」

「う…っ」

びゃん

びゃん

ほっ

ほっ

みみ

みみ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

「いいから続けなさい♡
ほら、腰を浮かせてはだめよ？
ち○ぽとタマは床にぴったり
擦りつけたまま上半身で
私たちを支えるの♡♡♡
床とセックスしながら
ご主人様の椅子になるー
こんな惨めなこと
ないでしょう♡」

「自分はオスとして
底辺だっけしっから
自覚なさい♡」

「びっ…っ…っ♡」

スト
ッ

ズ
ッ

ぐほ♡

ぐほ♡

みみ

み

「ぶひひ♡
いや、ごめんね藤丸くん
重たいでしょ(笑)
まさかメルトちゃんか
ここまでやるとは…♡」

「言っておくけどこれも
全部貴方のためにして
あげてるのよ♡
わかってるわね？」

「そうそう♡
男は悔しさをバネに
成長するからね(笑)」

ト♡

チ

チ

「はい8回目♥」

あと2回よ〜頑張って(笑)」

「あ〜あ〜」

キ〇タマ腫らして

かわいそうに(笑)

藤丸くん泣いてるよ

メルトちゃん♥」

「ふぐ…う…
メルト…♥
メルトお…う…」

「いいのよ、これくらいやらなくちゃ
効果ないんだから♥」

「だってほら見てご主人様♥

貴方が特濃精子で

私の子宮満たしてる間に

マスターが床に作った

水たまり♥」

ペロ

ペロ

ズ

ぐほ

ぐほ

みみ

み

ニギ

びゃる

「こんなシャバシャバで…
ホントは漏らしてるだけ
なんじゃないの?(笑)
私のマスターとして
こんなのは許せないわ♥」

「う〜ん、確かにこれは
ちよつとヒドイね(笑)
こんな薄いのを射精されたら
女のゴが可哀想だよ♥」

「う〜う〜…
う〜う〜…♥」

「ムムムム♡
だからこーやって私がい
思いつきり虐めてあげないっ♡
どうせ三倍に腫れて
ちようどいいくらいの
大きさんだから…
潰れるギリギリの力で…っ♡」

「あゝあ、大変だね藤丸くん♡
ま、こればかりは持って生まれた
ものだから仕方ないね〜」

「ぶっちやけオスの順列は
生まれでほぼ決まってるから♡
もうわかってるよね藤丸くん♡
キミがかた〜い床で
ち○ぽ虐められてる上で」

「ボクはメルトちゃんの
ぬちよぬちよ柔らかか
おま○こ好き放題
使えるわけ♡」

ぐほっ♡
ぐほっ♡

み

みみ

「上質なメス穴使えるのは
選ばれたオスの特権
だからね♡」
「ぐっ♡」

「ほらまた射精すよ
藤丸くん♡
準備はいいかな？(笑)
キミのメルトちゃんに
また腔内射精
キメるよおっ♡」

「ほらわかってるわね
マスターっ♡
今度こそきっちり
射精しないとこのまま潰」

「ぐっ♡…♡…♡」

「ふはり♡♡」

ん♡
お♡
は♡
ら♡

ゼ

クニッ

ぶ
ヂュ
ルッ

ゼ

ズ

ん!!

ひゃ
く

お





アッ!

ムッ!

アッ!

クッ!
クッ!
クッ!

アッ!

「ん~~~~♡♡♡
イイい~~~~♡♡♡
メルトちゃんのお穴
何度射精しても
イイ~~~~♡♡♡」

「このち○ぽを
射精させる
ためだけに
あるような穴
♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡
名器すぎる♡♡♡」

「おっほ♡♡♡
おっ♡♡♡」

おっ♡♡♡

「ああ~~~~♡♡♡
吸われる♡♡♡
ドロドロま○こに
溶けたち○ぽ
♡♡♡
♡♡♡」

「お♡♡♡
お~~~~♡♡♡」

おっ♡♡♡

ズ
ヂュ
ウウウ!!

ゼ
ジュ
ジュ
ジュ

ゼ
ジュ
ジュ
ジュ

「ひひひ♡♡♡
パンパンの子宮で貪欲に
飲み込んでやっ♡♡♡
この細い身体のどこに
入ってるのかな♡♡♡」

「あああ~~~~♡♡♡」

「あ??」

ド

ズ
ヂュ
ウウウ!!

〇〇

「ふう~~~~っ♡♡
う♡ふう~~~~♡♡
あゝまだ射精てる♡
.....あれ?
藤丸くんどうかした?(笑)」

「ん.....ああ.....
もしかして.....」

「勢いあまって
潰してしまった
かしらっ(笑)」

「.....ッ
.....!!」

ズ
ヂュ
ウウウ!!

ゼ
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ

ゼ
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ

「ごめんなさいね♡
私ご主人様とするときは
色々感じやすいものだから
つい力が入ってしまったっ♡」

「でもまあ別にいいわよね?
どうせ使い道のないモノ
なんだからひとっくらいら
タマひとつのほうが
精力増すわよきと(笑)」

「.....ッ!?」



「……気がつきましたか」

「ん……」

ほや……



「……気がつきましたか」

「……」

ぼや...



「……気がつきましたか」

「……」

ほろっ



「ふん縛り……」
「ふん縛り……」



おちっ♡

「学園の保健室です。
私は養護教諭として
潜入しているので…
どんな場所でも
要治療者は
いますから」

「保健室の先生…
はは、
婦長らしいな…」

「……ふむ。
どうやら体調はそれほど
悪くないようですね。
しかし聞きましたよ。
また随分無理をしたと…」

「さしつかえなくお話を伺います。
貴方に何かあれば私は——」

「うん…
うめん、嬢嬢」

「……まあさうしてあげて。
貴方はしほのへんりんが
休んでいなさう」

おちんちん

婦長との
絆レベル：10

「えへでも…
「いけません。
貴方には明らかに
休養が必要です。
聞き分けなさい」

「……うん
わかったよ」

「……………」
（婦長……婦長も今は
いじりもと変わらな
ように感じる……）」

（今は二人だから……？
……もしかして……
婦長み……）」

おち……♡

「ねえ、婦長……」

「ほこっ」



「……………」
「婦長……婦長も今は
いじもと変わらな
ようで感じる………」

「今は二人だから……？
……もしかして……
婦長な………」

「ねえ、婦長……」

「ほいっ」

「……………」
「すみません、患者……
生徒が来たようです」

「せんせー♡」

「あ……」

「あ、いたいた先生♡
何してんの〜」

「……患者の治療ですが、
何か御用ですか？
貴方には治療が必要な
ようには見えませんが……」

「またですか。
自分で清潔に保つよう
注意しなさいと言った
でしょう」

（え……!?
この生徒……
今なんて……!）

「いやそれがさ〜
またチンカスが
溜まつちやつてさ♡

また先生に
綺麗に消毒して
ほしいな〜って♡」

ぬっ♡

いっ♡

みち♡
みち♡

「……
また……？
この感じ……」

「今はマスターの
治療中です。
緊急でないなら
後に——」

「いやいや！
今回はマジ
ヤバいんだって♡
緊急緊急(笑)」

ぬっ♡

んんん♡

みち♡
みち♡

「……」



「ちよつと
嗅いでみて♡」

おき

ほろん♡

おき

おき♡♡♡

「おき」

おき♡

「ね、ひびっ♡
ニオイヤバいっしょよ？
先生に消毒してもらおうと
思っでずい〜と〜と〜と
洗わなかつたらこんなん
なっちゃった♡」

子カ

子カ

♡♡♡♡♡
ストン
♡♡♡♡♡
ストン
♡♡♡♡♡
ストン

「おっ♡ほ
た…確かにっ♡
これは…
緊急ですね♡」

ねちお

せう

せう

せう

「マスターの
治療より♡
優先度を上げて
処置せざるを
得ません…っ♡」

「そうでしょそうでしょ♡
そんなヤツほっといてさ
俺のチンカス掃除
してくれるよね？」

婦長と生徒の
絆レベル：30♡

「ぎつと味もスゴイよ〜♡先生好きでしよう？この中に詰まってる…!」

子カ

子カ

トストン♡♡♡トストン♡♡♡

「エツグいのチンカスチース♡」

「ええ、わかりました…♡」

ねちお

せう

せう

せう

「……すみませんがマスター、ベッドを譲ってください。貴方よりこちらの処置を先にしたいので♡」

「え……う、うん……」

婦長と生徒の絆レベル：30♡

「ふ、婦長…？
まさかソレ…！」

「ええ、もちろん
口腔で処置
します♥」

トトト
トトト
トトト

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

せろろ

うずうず
うずうず

「お、お…」

「せ、せ、早く早く♡
ち○ぽ痒いよぉ♡」

「男性器…特に
包茎ち○ぽ♡は
デリケートですから
当前かと思いますが…
それが何か？」

「慌ててはなりません。
ち○ぽにごべりついた
恥垢…チンカスは
しつこいですから…
まずはこつやって…」

「これだけ
チンカスとなると
唾液も相応量が
必要ですね…
まつたく…
こんなにるまで
放つておくなんて
…っ♡♡♡」

「うひひ♡
ごめんね先生え〜」

だだら
♡♡♡

トホトホ
♡♡♡

んあ
♡♡♡
ス〜ン♡
♡♡♡

「口の中で温めた
唾液を皮の中に垂らして
十分にふやかします♡」

「おほっ♡
先生の唾液
あつたけえ〜♡」

「それからいっしょで
皮の中ですよ〜〜〜
混ぜ合わせれば♡」

「んひよひよっ♡」

「貴方も」応は
男性なのですから決して
他人事では……いえ、
貴方の場合なおさら
覚えておくべきでしょう。
同じ包茎でも
童貞卒業資格のない者は
自分で処置しなければ
なりませんから」

「う…うん…」

「おっ♡おっ♡おっ♡
先生の手」キ
気持ちいい♡♡♡」

ぐっぢゅぢゅ

びゅびゅびゅ

ぐっぢゅぢゅ

「チンカスが掃除
しやすい状態に
変わっていきます
わかりましたか？
マスター」

「え？ お…俺…？」

「手」キではありません。
これは医療行為なので♡」

「むほっ♡♡♡」

「ん……ん」

「私の唾液とブレンドされてヒドイ悪臭でしょう……♡
こうなれば容易に舌でこそぎ落すことができますので……♡♡♡」

「うほほ♡早く♡早く♡俺のチンカス食べて先生っ♡♡♡」

「ええ♡
それではいただき……もとい♡」

「見てくださいマスター♡
これが食べ……っ♡
……いえ、処置しやすくなつたチンカスです♡」

「うぐ……!?」
「す、すごいニオイが……」
「……まじ……っ」

おあ……
ふ……
お……

「治療を始めます♡」





ん

あー

ん

ん

ん

ん

「んおっっっ」

ぬちゅんっ♡

ちゅんちゅん♡

ほっ♡

ぬちゅん♡



「455555」

はも♡♡♡

かんちゅんちゅん
ちゅんちゅん
なななな

ぬぢゅ

「んひょ〜♡おっ♡おっ♡おっ♡
キタ〜っ♡亀頭フェラ♡
先生フェラ上手すぎっ♡♡♡

「ぶえらわはめり味ぶえん♡
これはうりゃめいじふ〜…
ちんかすそりじ♡
れすので…♡♡♡」

はなな
はなな

ぬぢゅ

「とか言ってる
ホントはチンカス
だけじゃなくて
精液も欲しいん
でしょ?」
素直じゃないんだから〜♡

あゝそこそこ♡
カリ首イイっ♡♡
ひひひ〜そう!
そこは特に汚いから
重点的にね〜♡♡♡」

「……!?」
婦長…?」

ぬぢゅ

ヌルヌル

「！」

おせい

ブギョム

「おっ♡射精るっ♡♡♡」
んおの

ほっ!



「あっ♡あぁ〜っ♡
さすが先生え
すげ〜舌使い…♡
もう射精ちやったあ〜」

「んぷ…っ♡♡♡
ん…っ♡♡♡」

「ふあい…♡
わかりまひたあ♡♡」

「おほ♡お♡お〜♡
そうそうっ♡
尿道に残ってるのも
全部吸い上げて
ねえ〜っ♡」

カ
ル

お
せ
ッ

ど
ん
っ

ど
ん
っ

カ
ル

「あー！

まだ飲み込んだりやダメだよ！
チンカスも精液も
お口に溜めてねえ〜♡
先生には健康チェックも
してほしいからさっ♡」

カ
ル

ど
ん
っ

ちゅぽぽん♡



♡ちゅぽ♡

「ちゅぽ」

「はい先生
あ〜ん♡」

ぬる...

ほほか
かか

ゴボ

あ
ん
ん
ん
ん

ト
ン
ザ
ン

ち
よ
お

「...」

「せつかくだから
ソイツにも
見せてやって(笑)」

「うひゃ〜うひゃ〜」

「ぐんぐん」

(嗅いだことな〜んら〜ん
強烈な「オイ〜」

これが…
婦長の口から…)

はー

はー

「口の奥に溜まっているのが精液で
舌に乗っているのがチンカスだね♡
器用だね〜(笑)
おかげでち○ぽはぴっつかぴか♡
さすが保健の先生だね♡」

「な、なんでこれを
俺に…」

ちよお

ぬる…

ほほか

ゴボ

ゴボ

「え？
だって羨ましそうに
見てたから…
見たくなかった？」

「……………」

「まあいいや(笑)
それじゃあ先生
健康チェック
お願い♡」

「あい♡
しょうち
しまひた♡」

は♡
♡
♡

は♡
♡
♡

「口に射精した精液と
チンカスの味で健康か
見てもらうやつだけど
やつでもらったこと
ないの？」

「……あ、そついや
童貞卒業資格ないん
だっけ(笑)」

ちよよよ
「？」

ぬる…

ほほか

ゴホ

ゴホ

(あ、味つて……
それじゃあ婦長は
このまま「レ」を
食へ……)

「ま……」

「ほれれは……♡」

「け、健康チェックつて……♡」

「え？」



あ
ん
ん
ん
ん
ん

「めい」

グ
ン
ツ

も
ち
ゅ

「あめ」

びびびび
ちゅちゅちゅちゅちゅ

「ひひ、そうそう、お口の中で精液とチンカスよおしく混ぜ合わせてね♡」

ぶっ

ぶっ

「ひひ♡すげー
下品な咀嚼音♡」
[.....]
(おん)首→

ぐわん
ぶっ

もぐ

「でも仕方ないよね♡
100回以上はもぐもぐして
口中に染みわたらせないと
できない検査だから♡
まあ先生も悦んで味わって
くれてるみたいだし
ワインワインっでござい♡」

[.....]

ぐわん
もぐ

りゅん
びびび
ちゅちゅちゅちゅちゅ
ぶっ
もぐ

ぶっ



んはあ

「ん」

ん

んはあ

んはあ

んはあ

「ん」

「うひい〜キツう〜♡
口に溜めてたときより
くせえ〜!!(笑)」

「んんんんん〜」

はー♡

はー♡

ふ

ぬはあ

わ

「とても
美味しかった
です♡♡」

「いやいや
そうじゃなくて
健康チエツクのほう
なんだけど(笑)」

「そちらもまったく
問題ありません♡
これほど強烈なエグみ!
これほど強烈なオス臭は
健康な男性じゃないと
出せませんので♡♡」

「あ〜あ〜チン毛まで
綺麗に食べちゃって♡
そーいやパキパキいつてたな(笑)
それで…どうだった先生?」

「そっか♡
ならよかった〜」

「お、おえ…っ」

「でも先生よくそんなの食えるね、彼なんかもうええすいちやつてるのに(笑)」

「げぷ…っ♡」

そ…それは仕方ありません♡

私は女性なのでこの三オイや味が好物ですが…っ♡♡」

はい♡

「……もつとも…この状況で勃起しているようではオスとしての差は歴然♡それどころか寝取られ依存の兆候が…」

「ふん♡ あ、そうだ先生」

「はっ」

「マスターは二応

生物学的には男性に分類されるので本能的に嫌悪を感じたのでしよう♡」

「……」

はい♡

ゼンゼン



「ついでだしもう」発
抜いていってよ!

ほっほ

アッ!

アッ?

アッ?

「!?」

X

「おっほ♡
先生ま〇〇♡アツアツ♡」

「ちよちよひと…
いきなり何を—」

「おっ♡あ…慌てないでください♡
これも医療行為ですから♡
男子生徒が健全に過ごせるよう♡
性欲処理をするのも♡
養護教諭の職務です…♡」

「ひひ、そういうこと♡
まあもちろん童貞卒業資格がないと
できないけどね(笑)」

「……………」

ズブ

おっ♡

おっ♡
ズブ

「それより心配
なのは貴方…♡
先ほどよりますます
興奮している様子
ではないですか♡」

「先生の上の口も
下の口も両方
味わえないなんて
可哀想だな〜(笑)」

「やはり貴方には
寝取られ依存の
疑いが♡
ついでに検査を
するのでこちらに
来てください」

「え？
け、検査…？」



「うひょっ♡ほ♡ふ♡ほ♡つ♡つ♡
きもちい♡~~~~♡つ♡つ♡
先生の性処理穴♡♡♡
最高お♡♡♡つ♡♡♡
チンカス掃除で準備万端じゃん♡♡」

「ふ、婦長これは…!?」
「もちろんん検査♡ですっ♡
先ほども言った通り貴方には
寝取られ依存の兆候が見られますので…!」

「うちの生徒の
性欲処理を利用して
ん♡ふう…♡つ♡
貴方の症状を
見極めますっ♡
貴方は何もせず…!」

「本当にナニもしては
いけませんよ?
手はシーツから決して
離さないこと♡
わかりましたか?」

「わ、わかった…!」

「ふうっ♡
ふうっ♡」

せせせ

「う……」
(ふ、婦長が息するたびに
口から精液のニオイが……)

「ふうっ♡
ふうっ♡」

はっ♡

「そのうえ自分は見ているしかできず
オスとして圧倒的に劣っている
自覚させられてる……♡
この状況で勃起するのは
非常によくありません……♡」

びゅゅゅ
チュッ

「ふむ……♡
やはり先ほどよりさらに
興奮していますね♡
自分が長い時間をかけて絆を深めた
サーヴァントが性処理に使われて……♡」

はっ♡

「そ、それは……」

「私の口から他人の精液臭が
するのがイイのですか？
それでは……これは
どうでしょう♡」

ふっふっふっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ばっ
ばっ
ばっ

「んんん」

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

「どうれす?
別の男性のチンカスと
精液を口いつぱいに
ほおばつて食じた
ばかりの口内!」

「うわ
きたね〜(笑)」

「他人のち○ぽと間接キス(笑)
絶対嫌だわ〜」
「ひどい味れしょう」
「男性の貴方には特に!」

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

(婦長の舌から
伝わってくる……)
このエグみが……
あ、あの男の……!

「うひひっ♡締まる締まる♡ばっん♡
先生ってばソイツとキスしてから締めよすぎっ♡♡
こんなんすぐ射精ちやうよ♡♡」

「……だぞうです♡
貴方はどうしますか？」

びゅん
びゅん
びゅん

いっ
いっ
いっ

ちゅぽ

ちゅぽ

「この生徒にはこのまま
膣内に射精してもらいま
す♡♡
そういう決まりですのよ…」

「貴方も…んちゅぽ♡
このまま…♡♡」

「おおっ射精る♡
射精るうっ♡♡」

「んっ…っ…」

「おほいおほい」

あ

あ

あ

あ

あ

「あ」



「貴方は…っ♡いゆ♡
重度の寝取られ依存だと
診断できます…っ♡♡♡」

「この穴をいつでも
自由に使える学校生活
最高すぎるだろ♡♡♡」

「ふっ♡…っ♡…っ♡」

ゼジュ
ジュジュ

しるい
せつ
せつ

「はあく射精るう♡
性処理用のエロ穴に
搾られるう♡♡♡」

「おっ♡♡♡ぶお…っ♡
や♡やほり…っ♡♡♡」

ズチウウツ

カム

カム

「しかも全く勢いのない
漏らすような射精…♡
典型的な寝取られマツ
の症状です♡」

「ふっ♡…っ♡」

「自分でもわかるでしょう♡
私に促されるままに
手も触れることなく
射精してしまっただのです
から…っ♡♡♡」

「ぶあ…悔しいですか？
しかし治療はまず自分の病状を
認めるところからです♡
とりあえずは睪丸を片方潰されて
射精機能が(二応は)残っていた
だけでよしとしましょう♡」

「うん…うん」

ゼム
ゼム

「え、そうなの？
カワイソ〜(笑)
あくまで射精る♡」

「この特異点の修正にはまだ
かなりの時間がかかるでしょうから…
その期間に少しずつ治療していきます♡」

「治療の間自慰行為は
私が適切に管理しますので…
まずはそのお漏らし癖から
矯正しなければなりません」

「射精は多くても10日に1回！
その他の日は寸止めオナニーを
必ず10回以上行うこと！
わかりましたね？」

「一」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?
オナネタならいっぱい
提供するからさ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼユルニッ
ゼユルニッ

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぶり使う予定だから
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…この特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡
その状況で射精しない♡♡♡
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

アト♡

「…♡♡♡」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?
オナネタならいっぱい
提供するからさ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼユルニッ♡
ゼユルニッ♡

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぷり使う予定だから♡
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…この特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡
その状況で射精しない♡
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

フト♡

「…♡♡♡」

「うわ〜キツう(笑)
大変だね〜寝取られ依存は
まあ頑張つて?
オナネタならいっぱい
提供するからさ♡」

婦長と生徒の
絆レベル：
30→45♡

ゼユルニニツ
ゼユルニニツ

「俺は明日も明後日もこの穴
た〜つぷり使う予定だから
ね〜先生♡」

「ええ♡協力いただけると助かります♡」

「まあ最も…この特異点では
どこに行つても勃起材料には
困らないでしょう♡
その状況で射精しながら
こそ意味があります♡」

「かなり苦勞するかと
思いますが…
頑張つてくださいな、
マスター♡」

フト…

「…♡♡♡」

「どうしたんですか先輩
ぼーっとして」

「あ……ムリ……」

ぼーっ……

「大人しいと思ったら……
なに？
貴方また意識を
どこかへやっつてたの？」

「メルト……」

「どうしたんですか先輩
ぼーっとして」

「あ……ムシク……あ」

ぼーっ……

「大人しいと思ったら……
なに？」

「貴方また意識を
どこかへやっつたの？」

「メルト……」



「どうしたんですか先輩
ぼーっとして」

「...ムンムン...」

「大人しいと思ったら...
なに？
貴方また意識を
どこかへやっつたの？」
「メルト...」



「……………いめん
何か夢を見てたみたいで…」

「ぶんお気楽なこと。
…………でもあんまり幸せな夢じゃ
なかったみたいね?」

「ええ、辛そうにしてました。
大丈夫ですか、先輩」

「……うん」

「心なしか
顔色もよくないです。
無理はなすらないで
くださいね?」

「本当よ。
貴方に何かあったら
私たちが困るわ」

「あ——」

「ありがとう二人とも。
本当にもう大丈夫
だから」

「よかった。
ならー行きたいよー」

「マッシュ」

マッシュとの
絆レベル：5

「ほら、シヤキツとなさい。
貴方にはマスターとして
やらなければならぬ
仕事があるでしょう？」

「メルト」

メルトとの
絆レベル：10

「……うん、わかった。
みんなで協力して、
早くこの特異点を
修正しー」



「ふ……ふ……ふ……!?」

??

ぽ

ちゅちゅちゅちゅ

て

「愛してるよお〜
二人ともお〜
ちゅっ♡ちゅっ♡」

「んぽお〜
よく育ったねえ〜
僕のポテ腹ちゃん
たち♡」

「え……？え……？」

「ま……マッシュ……？メルト……？
そ……そのお腹は………??」

「お腹？」

「私たちのお腹が
どうかしました？」

「な、なんで……」

「ほら〜」

「なんでそんな……大きく……」

ちゅちゅ

ぽゅ

みちゅ

よ

「なんでって……
そんなの妊娠したからに
決まってるじゃないですか
ねえメルトさん」

「ええ、その通りよ♡
女性のお腹が膨らむ
理由なんて他にないわ」

「いくら童貞でも
それくらいわかる
でしょう？」

「はい……この特異点に来て早10ヶ月……ごく自然なことだと思えますけど……♡」

「本当に大丈夫ですか、先輩？」

「じゅ……!? え……!？」

「そっかそっか、もう臨月か……♡」

「時間が経つのは早いね……♡♡」

ちゅちゅちゅ

ぽゅぽゅ

「私、きちんと報告もしましたよね？ 検査の結果おじさまの子だったので産むことにしましたっ♡」

「私、クラスメイトの方々とも毎朝たくさんご挨拶してたのに……」

「え……!？」

みちゅ

よっ

「やっぱりおじさまはスゴイです♡って一緒に盛り上がったじゃないですか」

「私の場合は検査するまでもなかつたわ♥
だって私が身体を許すのはご主人様だけだもの♥」

「ほら、見てこのバランスの崩れたみつともない身体♥」

「完璧な私の身体を簡単にこんなにしてしまうなんて…さすがご主人様でしょう♥」

ちゅちゅ

ちゅちゅ

みちゅ

「はあ？
この特異点ではみんな受肉してるんだからサーヴァントだろうと子作りをしたら妊娠するのが当たり前じゃない♥」

「な……だ、だってメルトは……!？」

「…呆れた。もしかして気づいてなかったの？(笑)」

「……!!!」

ちゅちゅ

「あ、もしかして…
先輩だったらまだ半分
寝ぼけていらつしやいますよー」

「ダメですよおっ
おじさまを待たせているんですから
いい加減目を覚まして
準備をしてくださいなごう」

うす
うす

うす
うす

ちゅ
ちゅ

メルトとご主人様の
絆レベル：1000♥

マシュとおじさまの
絆レベル：1000♥

「じゅ、準備……？」
「まったく、
それすら忘れたの？
私たちが今から
出産するから♥」

「貴方は
それを応援する
んでしょ？」

ト
ト

「自分はマスターとして
それくらいしかできないからって…
貴方が言い出したんじゃない」

「しっかりしてよね…
そのために何ヶ月もオナ禁
してきたんでしよう(笑)」

「あ……え…」
「うひひひ♡
元気に蹴ってる蹴ってる」

うすうす♡

♡♡♡

ちゅちゅ♡

メルトとご主人様の
絆レベル：1000♡

マッシュとおじさまの
絆レベル：1000♡

「はーい、パパでちゅよ♡
今外に出してあげまぢゅ
からね♡♡」
「マッシュですよ(笑)
それが先輩の
お仕事でしょう。
ほら早くこちらに来て…」

トト♡

「短小童貞ちゅのぽ
出してくだちゅ♡」
「♡♡♡」

「さて、それじゃあ藤丸くんの準備もできたところはいよいよ出産の前に♡」

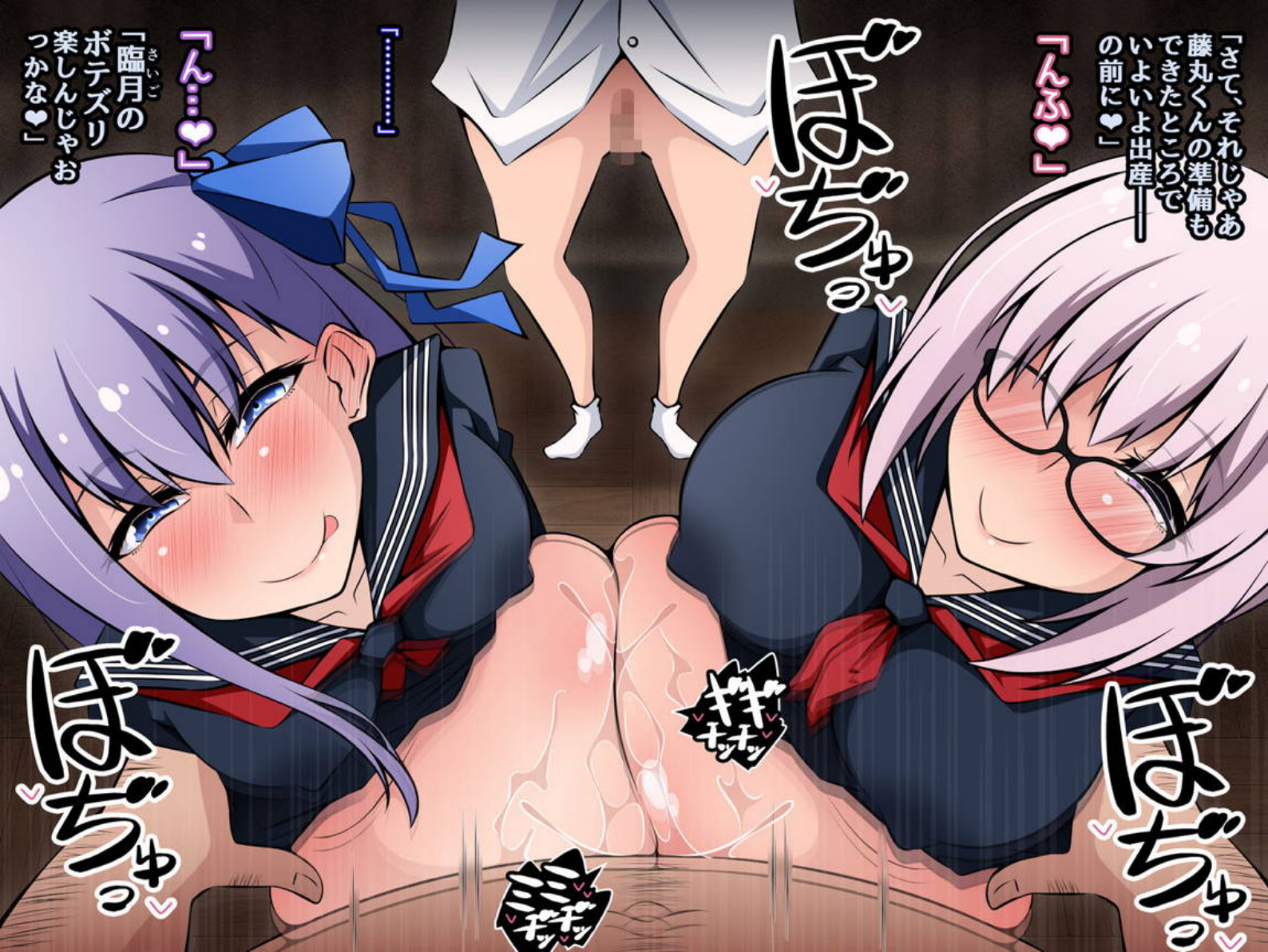
「んっ♡」

ほぢゅっ♡

「.....」

「んっ♡」

「臨月のボテズリ楽しんでおっつかない♡」



ほぢゅっ♡

ほぢゅっ♡

挿

挿

「もうおじさまじつたの……♡
ダメなんですよ？
妊婦さんには
優しくしないと♡」

「本当…遊びで
こんなにした
お腹をすらに
玩具にするなんて
なんてひどいパパ
なのかしら♡」

ほぢぢゅ♡

「ひひ、ごめんねえ
二人とも♡」
「でも二人のエロい
ポテ腹見てたり
我慢できなくてさあ♡
ついヤリたく
なっちゃったん
だよね♡♡♡」

ほぢぢゅ♡

ほぢぢゅ♡

せせり

ぶぢゅ

ぶぢゅ

せせり

ぶぢゅ

せせり



「あゝ♥中身がみつちり詰まったポテ腹ふたつぎゅぐつと密着させてち○ぼ挟むの最高お〜♥カタいような柔らかいような不思議な感触う〜♥」

「あん♥おじさまあ♥そんなに激しくしたら赤ちゃんびっくりしちゃいますよあ♥」
ほぢゅ

「.....」

「ひひ、平気平気♥散々ヤツてきたけどポテ腹つて意外と丈夫なんだよ♥どうせもう産まれるんだし景気付けってことだ♥」

「ぶふ...♥まあ孕ませた女を自由に使うのも強いオスの特権だけよ...♥」

ほぢゅ

ほぢゅ

ぶぢゅ

挿ちゅ

ぶぢゅ

挿ちゅ



「それにほらあ…
産んじやったら
また数ヶ月は
ボテズリできない
しさあ…っ♡」

「あ…っ♡
おじさま
それって…♡」

「ふふ、今の聞いた？
マスター♡
ご主人様だったら
もう二人目作る気
満々みたい♡
気の早いことね♡」

「え……」

「まあそういう
ことになるかな♡
もちろん二人が
よかつたらだけ♡」

「どうでしょう先輩♡
おじさまから三人目の
予約されちゃいました♡
…え？いいですよね？
その分特異点の修正が
先延ばしになるだけの
ことですし…♡」

「いいいや…でも…♡
「ナニ言ってるの？
マスターなんて
関係ないじゃない♡
短小ち○ぽの童貞が
子作りに関して何を
知ってるって言うの？」

「孕むの♡
弱いオスの許可なんて
いらないわ♡」

「あ、それも
そうでしたわ(笑)♡
「う…」
「わわわ♡」



「ふひよっ♡」

「あん♡」

「密着ボテ腹に
直射精い♡♡」

ベ
ぢ
よ
っ

ん
ん
ん

ジュ
ル

ぶ
せ
っ
ぶ
せ
っ

ブ
ヂ
ウ
ウ

「んっ♡」

「うわー」

「ふひひいっ♡♡
イイこの圧っ♡♡
射精促されるうっ♡♡」



「おっとごめんごめん♡
つい勢い余っちゃって〜♡」

「あら…よかったわね♡
御利益あるかも
しれないわよ(笑)」

「アツアツですね♡
……あ、おしりませ
見習う意味でも、
煎じて飲んだら
いかがですか？
先輩(笑)」

「……」
「……」
「……」

「本当よ♡
親指みたいなの
ち○ぽピンピンに
勃たせちやって(笑)
前より小さくなっ
たんじゃない？
せつかくのオナ禁も
寸止めオナニも
全く意味なかつた
みたいね(笑)」

「ごらごら(笑)
ダメだよ二人とも♡
好きだった人を
そんな風に言ったら」

「え……？」

「懐かしいなら♡
初めて会ったときは
二人とも藤丸くん
べつたりだった
もんねえ♡」



「それは、主人様とセックスする前！本物のオスを知る前の話でしよう？そんな順位、主人様のち○ぽを受け入れた初日に書き換えられているわ♡」

「今ではそうね…マスターの100倍好きよ、主人様♡」

「実は私も……いえ、私の感覚ではもう少し……200倍くらいでしょうか……先輩には申し訳ないですけど……やはり男性として差があり過ぎるというか……(笑)」

「う…ふ、二人とも…」

「そっかそっか♡ まあ仕方ないよね♡ 身体の繋がりがりつて強いから♡ 藤丸くんがながらい時間かけて築いてきた心の繋がりがりなんかよりよっぽどね…♡」

「女のコは子宮で恋しちやう生き物だからさあ♡ きつと他のコも似たり寄ったりじゃないかな♡ ほら、例えば…向こうにいるあのコとかも…」



ぷちゅ♡
ニヤ♡

んんん♡

りゅ♡

ぶせ♡
ぶせ♡

ドクッ

ドクッ

ぶぢゅ♡

ドクッ

※ご注意※
このあと歯なし描写があります。
(ファイルNo.【e103】)

血は出ませんが
苦手な方はご注意ください。

「お、オルタ……!」

みみぢぢ
みぢぢ

ぐほ
ぐほ

「さすがに喉ま〇〇を
使われてる最中に
会話は難しいだろ(笑)
呼吸もできてないのに!」

チャチャ

おんおん
おんおん

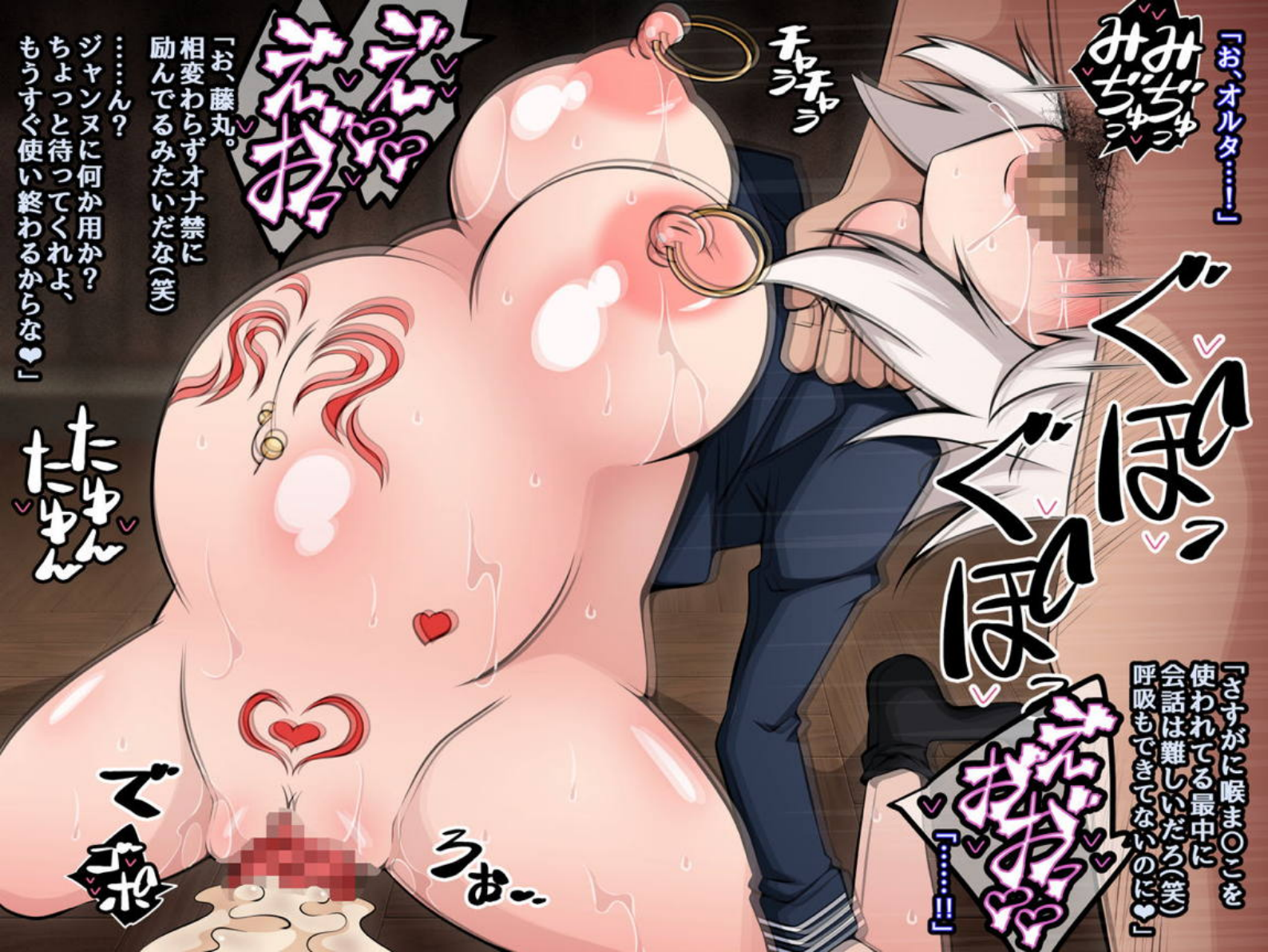
「お、藤丸。
相変わらずオナ禁に
励んでるみたいだな(笑)」

……ん?
ジャンヌに何か用か?
ちよつと待ってくれよ、
もうすぐ使い終わるからな!」

たーん
たーん

で
ポ

うお..



「そ、それ……」

「みみぢぢ
みぢぢ」

「ん？
妊娠のことか？」

ぐほ
ぐほ

「ああ、それとも
タトウーのことか？」

「これは俺がこいつを
完全支配した証に
入れてやったんだ」

「おお
おお」

「ジャンヌの白い肌に
一生消えない落書き
するのは楽しかった
ぞお」

「……そうだ、お前も今度
やってみるか？
まだ大分スペースが
余ってるし(笑)」

「チャチャ
チャ」

「おん
おん
おん」

「もちろん俺が
孕ませてやったんだ」

「ジャンヌとは授業以外でも
ハメまくったからな」

「もうすっかり俺専用の肉奴隷だ
妊娠以上の証明はないだろ？」

「たーやん
たーやん」

「ピアスも
似合ってるだろ」

「これも俺が
空けてやったんだ」

「……」

「うお」

「で
お」



「特に一番
気に入ってる
のはこれだ♡」

ぐほくぐほく

がが
ちゅっ
ちゅっ

「あ、勘違いするなよ？
これ全部ジャンヌも
同意のうえでヤツた
ことだからな♡
まあそうなるよう
馴けたのは俺だが♡」

げんげん
おんおん

がが
ちゅっ
ちゅっ

ぐほくぐほく

「家畜みたいで
カワイイ
不様だろお♡」

「…」

「授業でも教えたたる、
セックスで女を
徹底的に支配する
ことが大事なんだ♡」

「しかしこの十ヶ月で随分差がついたもんだな♡」

「え……？」

「考えてもみる、

お前が落第童貞ち○ぽで

寸止めオナニして居る間に♪

ジャンヌがどうなったのか♡」

ほくほく

ががちゅっ

「妊娠やタトウーだけじゃないぞ？
実はこの口ま○こにも特別な改造を……♡」

「……？」

ぱんぱん

「……」

ぱんぱん

ががちゅっ

「ジャンヌの穴はどこも

一級品でなあ♡

虐めれば虐めるほど

育つんだ♡

こんなに優秀なマジ穴

俺も初めてだから

つい張り切つてしまった♡」

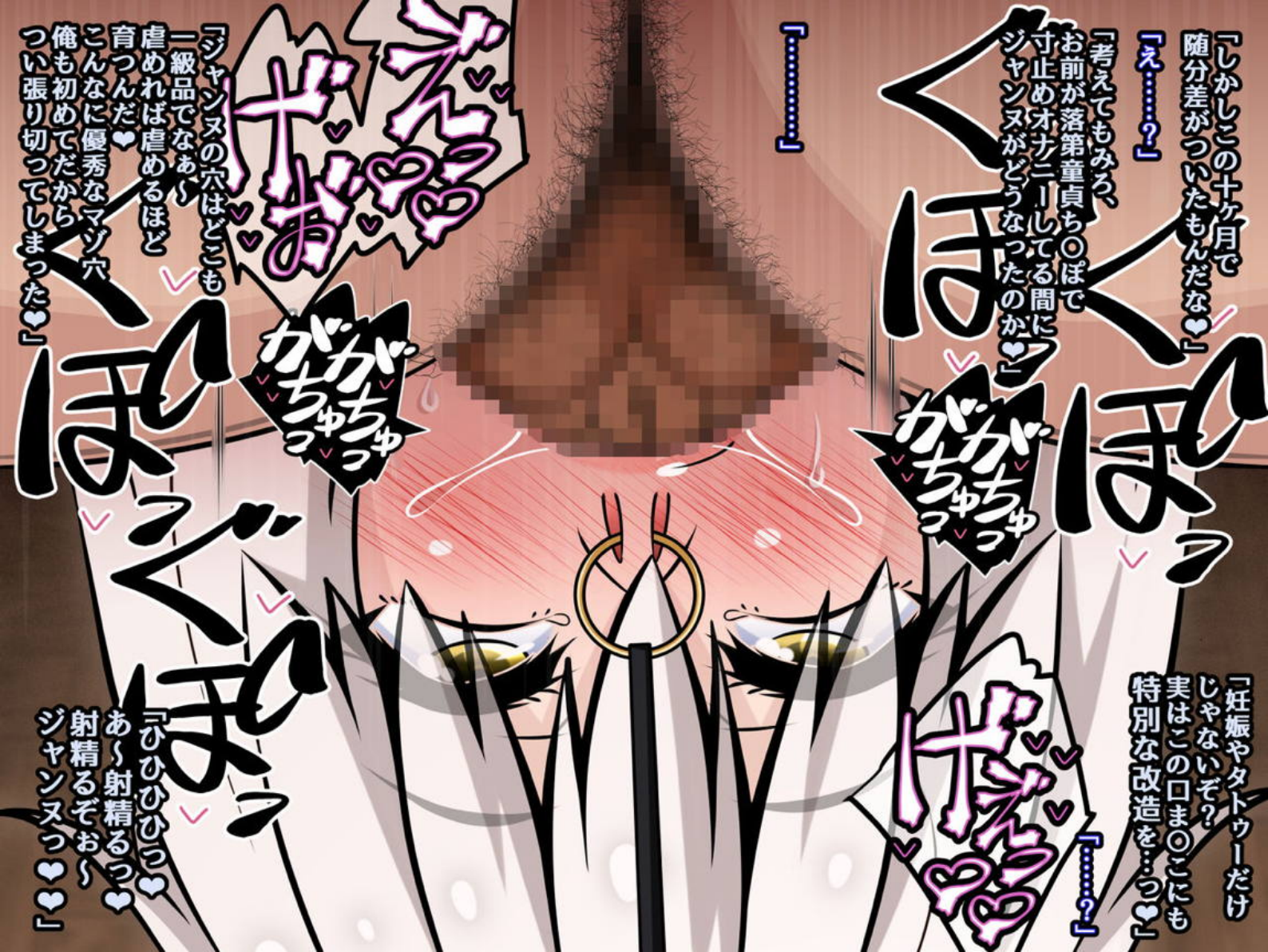
ほくほく

「ひひひひひ♡

あゝ射精るっ♡

射精るぞお♡

ジャンヌっ♡♡♡」



[=]

[=]

ド

ド
ド
ド
ド

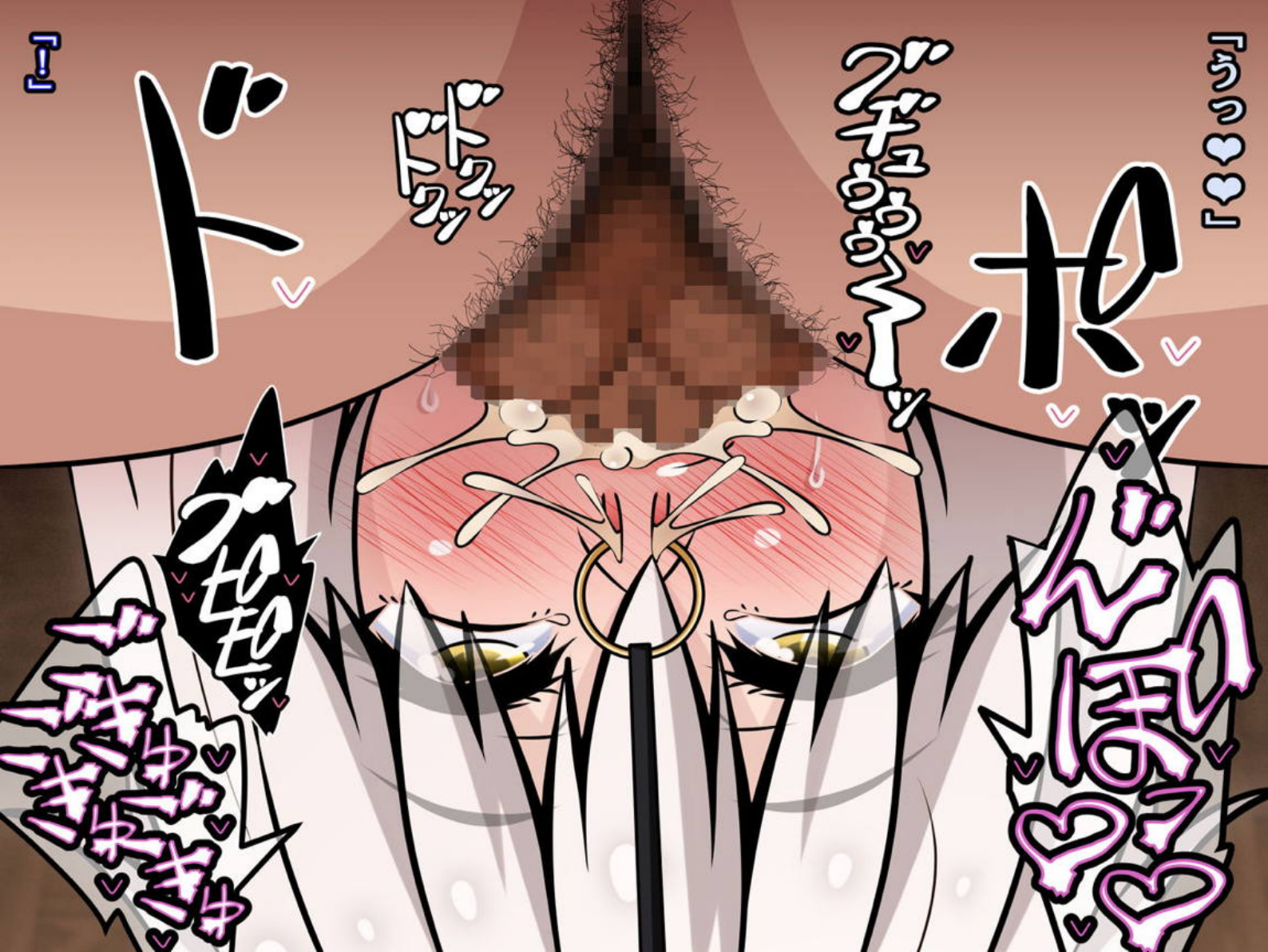
ビビビビ
ビビビビ

ハ

フ
フ
フ
フ
フ

オ
オ
オ
オ
オ

ニ
ニ
ニ
ニ
ニ
ニ



!?

ぐちゃあ♡

あ♡♡♡♡♡

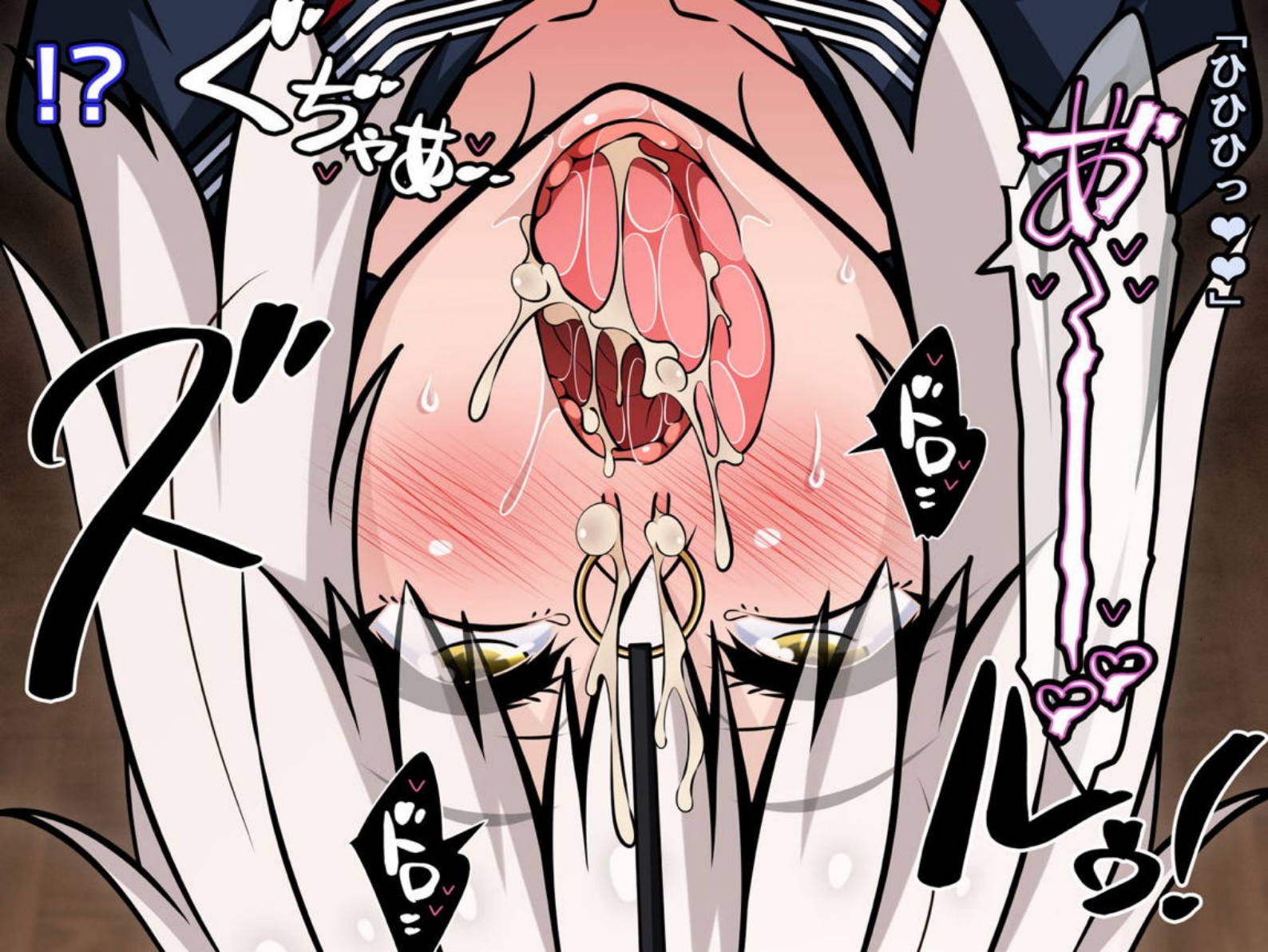
「わん♡わん」

ア

!!OT!!

!!OT!!

ア



「な…な…」

あ

「な…な…」

「そのほうが俺が
気持ちいいからな
回の中でち○ぽを
思いきり暴れさせても
歯は当たらんじ…
当たり前だが(笑)」

「ひひ…ひひ♡
これ見えるか藤丸♡
ジャンヌの口内…」

ぐちやあ♡

「歯を二本残らず
抜いてやったんだ♡
綺麗だろ♡」

ズ

「歯茎でち○ぽを
甘噛みさせると
またイイんだなあ
これが♡
どうだ、最高だろ
藤丸♡」

「あ…う…ひひ」

ト

ト

「ああそういえば
ジャンヌに話が
あつたんじや
なかったか？
何か：特異点？の
修正がどうか！」

ジャンヌ・オルタと
教師の絆レベル：
1000♥

「はは、だそうだ(笑)
残念だったな藤丸：
まあそう落ち込むな♥
より強いオスに
支配されたがるのは
メスの本能だ♥」

え

トハハハ

シト

シト

え

「とくいてえん？
そんなの
どうれもいひい
~~~~~♥  
ますたあなんかより  
だんなさまのほうか  
だいじだもおん♥♥」

トハハハ

え

「ジャンヌのことは  
諦めるんだな♥」

「.....」

「えぽっ♡えぽっ♡  
えぽっ♡えぽっ♡」

「お、婦長……っ」

「あ、藤丸くん♡  
どうしたの？  
先生に何か用？」

ぐんぐん

「タイピング悪いなあ(笑)  
ちよつと待つてるよ  
先生いま喋れないから♡」

ぐんぐん

ふぢゅ

ばちゅ

ばちゅ

ぎゅあうん

ミミズ

ふぢゅ

「童貞の用事なんかより  
俺らの性欲処理が優先  
なのわかつてるよな？」

「ちよつと♡  
そんな言い方  
可哀想だよ」

たんたん

ぢゅ

ぢゅ

ぢゅ

せくら

「いくら事実でも  
もつとオブラートに  
包まなきや(笑)」

「……………」



「ごめんね、藤丸くん先生のボテ腹でも見て元気出して♡」

「ふ…婦長まじ…」

「いつ見てもエロいよね♡」

「母乳まで出るようになってちやつてさ♡」

「男子生徒みんなで協力して孕ませたかいがあったよ♡」

「んぽ♡んぽ♡」

「……みみんな……?」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「この学園で先生の穴使ったことないのって童貞卒業資格がないお前くらいだろ(笑)」

「んぽ♡んぽ♡んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「んぽ♡」

「つまりお前以外の男子生徒は全員穴兄弟ってこと♡」

「当たり前だろ先生はみんなの共有オナホなんだから♡」

「.....」

「これがまた濃厚で甘くて美味しいんだ♡ あーそうだ」

藤丸くんも飲んでみる？」

ばちゅ

「おっ♡♡♡」  
ぽっ♡♡♡

ばちゅ

ぎゅあうん

「はは、お前も結局童貞のことバカにしてんじやん(笑)」

「.....」

「いやいや僕は同情してんだよ♡ だってそうじやん？ ち○ぽがちゅちゅいばっかかりに母乳も飲めなければいけません」

「おっ♡♡♡」  
「おっ♡♡♡」

ぶちゅ

ニビ

ぶちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

くほ

「.....あゝでもダメか♡先生の母乳は大人の味だから童貞にはまだ早いね(笑)」

「おっ♡♡♡」

「おっ♡♡♡」

「先生の穴使って自由に射精もできないなんてさ.....ひひっこんな風にい.....っ」



「さっっ」

「1-1」

んげんげんげん  
んげんげんげん

あーん

「さっっさっっさっっ  
さっっさっっさっっ」

っせ

ト

んげんげん

んげんげん

んげんげん

んげんげん

んげんげん

んげんげん

んげんげん

んげんげん  
「さっっ」

んげんげん

「ひびっ  
すげ〜吸いつき  
ほらこっちも  
射精すよ〜先生」



「ほら、先生飲んで飲んで飲んで  
学園中から集めてきた  
生徒全員ぶんの精液♡  
藤丸以外(笑)」

「う……ん」

「ほ……っ♡♡」

「しかも僕たちの子まで  
産んでくれるなんて♡  
感謝してもしきれないよ」

「まあ誰が父親か  
わからないから  
責任は取れないけど♡」

「はあ……っ♡♡♡」

「ス……ス……ス……」

「僕たちから先生に  
感謝の印だよ♡  
女生徒はほとんど  
教師連中に取りられ  
ちゃったけど  
先生がみりんな  
まとめて相手して  
くれたから♡」

「お……あ……」

「は……ん」

「あ……」

「は……っ♡♡」

「ど……」

「まあ細かいことは  
気にしないで……  
ほら、ぐぐぐぐぐぐ  
いつちやひひひひひひ♡♡♡」

「な……ま……」

「ふちゅー」

「あむっ♡♡♡」

「おっほ♡  
イイ飲みっぷり  
だねー先生♡」  
「さすが先生♡  
ほらほら♡  
イツキ♡  
イツキ♡」

ふーっ

キキキキキキ  
キキキキキキ  
♡♡♡♡♡♡

びゅん♡  
びゅん♡

びゅん

ふーっ

びゅん





ゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴゴ

「ゴゴゴゴゴゴ」  
「ゴゴゴゴゴゴ」

ゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴ

ググググ

ゴゴゴゴゴゴ

「ゴゴゴゴゴゴ」

「う……ん」

も

わあ

また♡

「う……ん」

はっはっはっ♡♡♡♡

「ひひ、くっせ〜♡  
 こりゃ胃は完全に  
 精液タンクだあ♡」

「ホントにあれだけの量  
 一気に飲み込むとか♡  
 毎日毎日生徒の  
 精液で腹満たしてた  
 だけあるわ♡」



「ふ……ちゅ……」

「残念だったね、藤丸くん  
先生つてばもうキミのこと  
なんかどうでもいいみたい(笑)」

「んはあ……♡」

婦長と男子生徒(藤丸以外)  
の絆レベル：1000♡

「まあ先生も  
この学園で色んな  
男子生徒とセックス  
しまくつて……  
お前がいかにかに  
低レベルなオスか  
わかつたちやつたん  
じゃねの？(笑)」

「だらうね、  
先生みたいなイイ女  
が傍にいたのに  
ずっと手を出して  
なかつたとか  
ダメダメすぎ(笑)」

「はあ……♡」

「まあこんな腹に  
なつた時点でねえ♡  
特異点？が  
どうのこうのつて  
キミとの約束より  
出産子育てが優先  
つてことでしょ♡」

わあ

ヌ……♡

「まあそんな  
わけだから……  
藤丸くんは  
せいせい  
先生に言われた  
オナ禁

頑張りなよ♡  
無駄だらうけど(笑)」

「はあ……♡」

も

「……」





「あつ♡もっ♡  
もう帰って♡きたのねっ♡  
ふふっ♡  
情けない顔…っ♡」

「いかがでしたか？  
皆さん幸せそうだったでしょう♡  
先輩といた頃よりよっぽど♡  
ふふっ♡」

「サーヴァント皆攫取られ  
てたのに何もできず…  
のこの帰ってくるなんて…  
ホントー」

1P  
2P  
3P

キキキ

キキキ

ゴッ

ゴッ



「ふ、二人とも…」

「おっ♡」

「おかえりなさいっ♡」

「先輩っ♡」

「こんな格好で失礼しますっ♡」

「可哀想なマスター♡」

「可哀想な先輩♡」

「……」

「ひひっ♡あゝ  
ちよつと待つてね？  
いま破水させてるところ  
だから♡」

「は、破水つて…  
そんな…強引に…」

「あつ♡♡」

「あつ♡♡」

「ち○ぽで子宮口を  
こじ開けるだけ♡  
簡単でしょ？  
まあ藤丸くんの落第ち○ぽ  
じゃ無理だけど…(笑)  
二人とも出産は初めて  
だから僕がしつかり  
リードしてあげない  
とね♡」

「あつ♡♡」

「あつ♡♡」

「え？  
あゝ平気平気♡」

「童貞じゃわから  
なくて当然だけど  
これくらい全然  
普通だから♡」

「……………」

「あつ♡♡」

「それにほら、  
せっかくだから  
二人同時に出産  
させたいじゃん？  
だからこうして  
重ねて交互に  
ヤツてるわけ♡」





「お♡ひひ…  
破水来たね♡  
マシユちゃん♡」

「ま、マシユ…!!!」

1P  
マシユ

「あれあれ…?  
どうしたのかな  
メルトちゃん♡  
マシユちゃんに  
遅れを取るなんて  
らしくないんじや  
ない?」

「あ♡♡」

お♡

「わっ♡私も♡  
もう♡♡♡」

「慌てないで♡  
ご主人様♡♡♡」







「ふほ♡きたきた♡  
よぉろし偉いぞ二人とも  
上手に破水できたね♡」

「あ♡ほ♡ほ♡ちん♡  
ありがとお♡  
「アハ♡ちん♡ちん♡」

ブチャッ♡

「あ♡い♡ま♡  
どうせんよ♡  
「アハ♡の♡  
へん♡」

「三人の羊水温かくて  
気持ちいいよ♡」

「ま、マシユ…  
メルト…っ」

い♡い♡い♡  
い♡い♡い♡  
い♡い♡い♡  
い♡い♡い♡  
い♡い♡い♡

あ♡あ♡あ♡  
あ♡あ♡あ♡  
あ♡あ♡あ♡

あ♡

は♡  
は♡  
は♡



あ♡あ♡あ♡  
あ♡あ♡あ♡  
あ♡あ♡あ♡

は♡  
は♡  
は♡

「ひひ…♡  
それじゃあ二仕事  
終えたところで  
僕も…っ♡」



「あゝダブル陣痛ま〇こ  
たまんね〜っ♡  
おらキメろメスどもっ♡  
陣痛アクメキメろ♡」

「な、なこっ…〇いっ♡」

「この独特のうねりがっ♡  
膈壁が生きてるみたいにな  
ち〇ほに絡んでくるんだよ♡  
名器でこれやられると  
もうねえ…っ♡♡」

「しかも二人同時っ♡  
射精中に抜き差しし  
しながら交互に射精♡」

「なにして射精だよ♡  
陣痛アクメキメてる  
ま〇こはこの瞬間  
しか味わえない  
プレミアだからね♡  
射精しとかなきゃ  
もったいないよ♡」

「実は二人同時に  
破水させたのは  
コレが目的  
だったらしい♡」



「でも二人は……っ」

「あくあく心配し過ぎだつて(笑) 二人のこと大事なのはわかるけどちよつと過保護すぎるよ」

男なら女はもつと 雑に扱わなきや♡」

セーラー♡

ズキ♡

セーラー♡

ズキ

ズキ

ズキ

セーラー♡

「藤丸くんはどうも

その辺りわかって ないなあ(笑) そんなだから寝取られ ちゃうんだよ♡

だいたい出産なんか ま○こからガキ ひり出すだけ なんだからさく♡」

セー

お♡

セー

「女の」もその方が 嬉しいんだよ?

オスに虐められる ように設計された 生き物だからね♡ 授業で習ったでしょ?」

お♡

セー

お♡

「女の」なら 誰でもできる

簡単なお仕事 でしょ(笑)

ほらもつと 気楽に楽しんで♡」

「はあーっ♡はあーっ♡  
ほ…ほら、先輩なりに  
してるんですかつ♡」  
ブル

「親指ち○ぽ  
ピクつかせて  
ぼくっとしてる  
場合じゃない  
ですよ♡」

「え…え…」

「そ…っ♡そ…っ♡  
貴方には貴方の仕事  
があるでしょうっ♡♡」  
ブル

ブル

「ああ、そういえば  
そうだったね(笑)  
ひひ、それじゃあ  
藤丸くん準備は  
いいかな？」

「あ…」

たは♡たは

たは♡たは

どは♡あ

は♡り♡り

ぶ♡き

ぶ♡き

ぶ♡き

た♡

た♡





おっぱい

おっぱい

おっぱい

おまんこ

お尻

おまんこ

はははははははは

「三」

「で…出てきたあつ♡」

ががががが

「あ〜あ…頭出てきちゃったわよ♡」

「ほ♡ほら先輩早くっ♡」

早くシ♡ってくださっ♡いでない♡と先輩の応援が届く前に生まれちゃいますよお♡♡♡」

がっ

がっ

さっ

くもくも

ズズズズ

みぎあ

「ふふふふふふ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「この日のために何ヶ月もオナ禁してきたんでしょっ♡」

「早くシないよ」

せうかくの射精の機会がなくなっちゃいますよっ♡♡♡早く射精するのは得意でしょっ(笑)」

ハハ

はぁはぁ

みちあ

グムグム

オッ

「あっ♡おっ♡  
わ..私もおっ♡」

「ふっ♡ぐう♡♡」

「降りてきたっ♡  
でっかい塊いっ!!」

「ほほ♡  
いいねキタね♡  
二人同時出産♡  
さすが僕が仕込んだ子♡  
空気読めるね♡」

がっ

オッ

クモクモ

ズズズズ

みちあ

「ふうっ♡  
ふうっ♡」

「ほらっ♡♡  
メルトさんも  
きましたよ  
先輩っ♡」

「どうですかっ?  
見えますかっ♡  
私たちのま〇」  
から出てる頭♡♡」

「特異点を修正する  
任務を無視して  
おじさまと作った子♡  
ちやあんと見て  
シ」ってますかっ♡」

オッ



「ねっ♡ねえ今どんな気持ちっ？私、寝取られた女が他人との子産むの見てシ「る男の気持ちってわからないからっ♡教えてくれる？(笑)」

みちあ

グムグム

「うう…♡♡♡  
メルトお…  
マシユウ…♡♡」

「なにその返事(笑)  
泣くほど悔しうっ♡♡♡  
いいのがしら…♡♡」

「あはっ♡♡イイ顔ですね先輩♡  
ふふ…それじゃあ「うっしましよっ♡」

がっ

がっ

シ

クモクモ

ズズズ

みちあ

「先輩の射精が私たちの身体まで届いたらあ…♡おじさまと二人目作らずに先輩と特異点を修正してカルデアに帰る♡それでどうです？」

「おお、いいね♡藤丸くんまたとないチャンスだよ(笑)」

「……………!!  
ふうっ♡ふうっ♡  
ふうっ♡ふうっ♡」

「なんだ、簡単じゃないっただ射精せばいいなんてほらほらあ——」

「決まりですね♡それじゃあ——」

「射精せつ♡」

短小童貞マスター♡♡♡

「射精せつ♡」

短小童貞マスター♡♡♡

セッ

セッ

セッ

「~~~~♡♡♡」



「ぶっ♡あゝあゝ♡  
ぜんっぜんダメでしたね♡  
ほんとと垂直落下(笑)」

「うっっっ♡...♡うっっっ♡」

「何ヶ月も溜めて  
結果お漏らし射精なんて♡  
もうすっかり寝取られマソが  
板についたわね(笑)」

「そ...それじゃあ私たちも...っ  
も♡もう限界です♡から♡」

「うっっっ♡」

「うっっっ♡」

「そ♡そるるるる  
産みますねっ♡」

「うっっっ♡」

「うっっっ♡」

「うっっっ♡」

「私たちの穴から  
先輩とはまったく  
関係ない子が  
ひり出るところっ♡  
すっかり目に焼き  
つけてくださいつ♡」



んあぁあぁあ!!

ぐんぐん

あ

んあ

んあぁあぁあ!!

か

か

あ

ぐんぐん

あ



ズンズンズン

ズン

ズンズンズン

おおお  
おあ  
おあ

「……」  
ちやあ

「……」

ほか

ほか

ほか

おおお  
おあ  
おあ

じゅん

ズンズンズン

ズン

ズンズンズン

ズン

「はーい、お疲れ様  
二人ともよく産めました」

「お♡お♡  
おじさまあ♡」

はー♡

はー♡  
はー♡

「同じタイミングで  
ぴったり同時出産  
偉いよー二人とも♡」

「あー…ありがとう  
ごぎいます♡  
ご主人様あ♡」

ふー♡

ふー♡

あー

ぞうお

いっ♡

せ♡

せ♡

がー

がー

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

「……………」



「はあ……っ♡はあ……っ♡  
ど……どうでしたか先輩♡  
私たちの出産♡♡は♡は♡  
きちんと頭に焼きつけて  
くれましたか？」

「マッシュ……♡は♡は♡

「ふ……っ♡ふふ……っ♡  
私たちが主人様の子を  
抱いた感想はどうかじ……っ♡  
光栄に思っべきよっ♡」

「メルト……」

あ

ぞろお

ぞろお

ぞろお

ぞろお

が

が

あ

あ

「なにせ……その子たちの  
子育て係をさせて  
もらえるんだから♡」

「貴方みたいなオスの底辺  
にとつてこれ以上の  
名誉はないでしょう(笑)」

「こ、子育てに係...?」

「はい♡  
強いオスが好き放題  
気に入ったメスを孕ませて  
弱いオスが子を育てる♡  
ごく当たり前のこと  
でしよう?」

「童貞卒業資格もない上に  
寝取られマゾに堕ちた  
貴方の価値はもうその程度  
しか残ってないってこと♡  
身の程をわきまなさい♡」

あ

ぞろぞろ

あ

「ははは...」

「まあそれがこの  
ルドルだからね♡  
悪いけど頼むよ  
藤丸くん♡」

「この特異点で童貞なのって  
貴方くらいだから(笑)  
マスターなら責任くらい  
持ちなさい」

あ

「もちろん他のサーヴァントが  
産んだ子も全員♡一人だよ♡」

ぞろぞろ

ぞろぞろ



「特異点を修正したければ  
子育ての傍らお一人で  
頑張ってください(笑)ー  
私たちは約束通り  
おじさまと二人目  
作りますからー♡」

「子育てを最優先に  
不眠不休で頑張れば  
またオナニーさせてあげる♡  
それまでは当然射精禁止よ♡  
わかってるわね?」

マッシュとの  
絆レベル：0

あ

せせ  
っ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ

メルトとの  
絆レベル：0

「くすくす♡  
物分かりがいいですね  
偉いですよ先輩♡  
大丈夫ー先輩なら  
きっとできますよ(笑)」

「貴方みたいなのが  
マスターなだけで  
恥ずかしいんだから…」

「これ以上私に恥を  
かかせないようからね?」

「うん……」



「お、俺…俺は……」

「うん、わかってるよー。  
自分の周りにいた子たちみーんな  
誰かに取られちゃった上にオナ禁…  
っていうか射精禁止の寸止めオナニー？  
毎日させられてるんでしょ(笑)  
そりゃあ脳みそ壊れて  
マゾち○ぽに改造され  
ちやつても仕方ないよね♡」

マシュとの  
絆レベル：0

「いや俺は…そうならないために…  
……いや……なんだっけ……？」

「ほらほら泣かないで♡  
深く考えない方がいいよ(笑)」

「くすくす♡」  
「くすくす♡」  
「くすくす♡」

メルトとの  
絆レベル：0

「じゃあね、藤丸くん♡  
お互い頑張ろうね(笑)」

「はい、おじさま♡」  
「はい、ご主人様♡」

「ひひ、それじゃあ  
行こうか、二人とも♡」



そう言い残すと  
おじさんは二人を連れて  
姿を消した…

産んだばかりの子を  
俺の手の中に残して…

はー♡

はー♡

あ

マシュとの  
絆レベル：0

せせ  
っ

い  
っ

せ  
っ

あ

メルトとの  
絆レベル：0

ぎ  
あ

ぎ  
あ

が

あ  
あ

あ  
あ



「.....」

まずは.....この子たちの  
へその緒を切って.....  
身体を拭いて.....  
あとは.....どうするんだっけ？

あとで婦長か.....誰かに聞いてみよう。  
彼女たちの子もそのうち  
育てることになるのだから.....

マシュとの  
絆レベル：0

メルトとの  
絆レベル：0



特異点の修正は……  
もう少し先になりそうだ。

「……………」  
やらなければならぬことは  
たくさんある……

はー♡

あ

マシュとの  
絆レベル：0

ゼゼ  
のっ

でろ  
お

い  
のっ

ゼ  
のっ

か

メルトとの  
絆レベル：0

あ

あ  
ぎあ  
あ

あ  
ぎあ  
あ

あ  
ぎあ  
あ

か

あ  
あ  
あ



「……………」

やらなければならぬことは  
たくさんある……………」

特異点の修正は………  
もう少し先になりそうだ。

マシュとの  
絆レベル：0

メルトとの  
絆レベル：0

あ

はー♡

ゼッ♡

ぞろ♡

い♡

ゼッ♡

あ♡

あ♡

あ♡

あ♡

が♡

あ♡



特異点の修正は……  
もう少し先になりそうだ。

「……………」  
やらなければならぬことは  
たくさんある……

マシュとの  
絆レベル：0

メルトとの  
絆レベル：0







おしまい♡